
幼馴染は狼で狂戦士

餓鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染は狼で狂戦士

【Zコード】

Z2295Y

【作者名】

餓鬼

【あらすじ】

もし、佐藤や著我に幼馴染みがいて狼だったのらなお話し

キャラ崩壊などがありますので原作のキャラのままが好きな人はお戻りください

プロローグ（前書き）

ただの思いつきですが暖かい田で見守つて下さい。

プロローグ

夕方、一つのスーパーのお菓子売り場に一人の少年が来ていた。
「今日は『氷結の魔女』（ひょうけつのまじょ）は居ないか」
少年はお菓子を手に持ちながら呟いた。しかし、少年の目線は弁当売り場に向かっていた。

「ジジ様が貼り終えだし、暴れますか」

少年は眼鏡を胸ポケットにしまい弁当売り場に走つて入った。

「今日は骨のある奴は居るか！」

少年は吠えた。

「おら！」

一人の男が少年に殴りかかつたが簡単に避けた。

「威勢は認めるが弱いな」

少年は男を殴り飛ばした。

「何だよ、あいつは」

一人の男が殴りかかつたのをきつかけに次から次へと少年の元に男が集まってきた。

「協力プレーでエすか、俺には勝てねエよ」

数は十人が弁当は五個、月桂冠は無し、一分で片付けるか。

少年は疾風の如く男たちを抜き去つた。

「逃げられたか」

男の一人が呟く。

「残念ここに居るぜH」

少年は自分も重い男を片手で持ち上げ床にたたきつけた。

「こんな奴に構わずに弁当をとるんだ」

耳にピアスを付けている男が言うと、他の男たちは弁当に向かつて走つていったが少年によつて全員は倒された。

「今日は豆腐ハンバーグ弁当にするか」

少年は弁当をとると何も無かつたかのようにレジに歩いて行つた。

「あ、あれが『疾風の狂戦士』（しつぷうのバーサーカ）かよ
倒れていた男は力尽きる前に呟いた。

スーパーの外では少年が夜の空を見ながら言った。
「明日は何所の地区に行こうかな」
少年は眼鏡を掛け直し帰つていった。

キャラ設定（前書き）

思いつきで書いたものなので暖かい日で見てください

キャラ設定

名前：緋音 あかね 横莉 かいり

二つ名：『疾風の狂戦士』

性別：男

容姿：上の中で髪は真っ白で普段は伊達眼鏡を掛けていて生徒会に居る真面目なイケメンに見えるが戦闘になるとブレザーに眼鏡を締まって口調が悪くなる為周りからは好かれてはいない

交友関係：佐藤洋と著我あやめとは小さい時から友人で中はとつても良い。

家族構成：父と母は高校入学と共に他界。妹は心臓に病気を持ちドナー待ち。

二つ名の由来：狼の一人が自転車を爆走していたのを見て疾風のようには速かつたためその名がついたが以前は『鮮血の王』と恐れられていた。狂戦士は狂ったかのような戦闘のスタイルから来た。噂では『帝王』『魔術師』の次に強いと言われているがその強さは今は不明だ。

戦闘スタイル：普段は足と拳だけで戦うが敵によつては割り箸や力ゴなどを利用するが物を使うと右に出るものはない。

好きな物・人・半額弁当、妹、友人、著我

嫌いな物・人：大猪、嘘つき、弱い物

設定が増えましたら書き足します

帝王（龍書体）

思ひつもで書いたものなので暖かい田で見守つて下せ。

帝王

「僕が学校に行くとそこには残念な友人が居た。

「どうしたんだい、その怪我」

ちくわを食べていた彼は顔を上げて話した。

「それが覚えてないんだよ。スーパーに行つたどこまでは憶えてるのにな」

彼は佐藤洋、僕の学校の数少ない友人の一人。

「スーパーに行つてその怪我はないと思うけど……」

僕は頬をかきながら言った。

「櫂莉は信じてくれないのか？」

「信じたいけど、何だか嘘に聞こえるんだよね」

僕は分かつていて。なぜ、彼が怪我をしたのかスーパーに行つただけで怪我をしたのか。

「やんちゃしてるのはいいけど無茶はしない方がいいよ」

「今日も行つてみようと思うんだけどな」

「また、怪我すると思うけどな」

僕は苦笑いをしながら言った。

「あそこで何が起きたのか思い出したいんだよ」

「それなら、気よ付けなよ」

「え、一緒に行つてくれないのか」

その言葉は意外だったよ。

「今日はバイトのシフトが入つてるんだよ」

「バイトなんかしてるのか」

「お金が足りないからね」

洋は僕の親が亡くなっていることは知らない。

「僕も仕送りが少ないんだよな」

「お金が少ないと僕等学生は生きていけないからね」

今日はお昼の弁当が無いからもっと過酷なんだよね。

「それより、今日も昼飯食べないのか」

「まだ朝なんだけど」

「いや、お昼一緒に食いたいと思つて」

「お金が勿体ないからいいや」

「今月はピンチなんだよ。お金を余分に使つてられないんだよ。

「この金の亡者ガ」

「はあ、そんなこと言つてたらどうなるか知らないから」

「僕は笑いながら拳を構えてみた。

「僕が悪かったからその拳をおさめてください」

「分かつたよ。でも、これだけは言つておくよ」

「僕は真剣な目で洋を見た。

「なに?」

「スーパーには行かない方がいい。これを決めるのは洋自身だけど、

忠告はしたから」

洋は頭に?を浮かべながら考えていた。

時は夕方

「時間があつて西区に来てみたけどあなたに会うなんて意外ですね」
僕の目の前には白いコート羽織つた大柄の男が立っていた。

「お前が噂の狂戦士か」

男はニヤリと笑いながら話を続けてきた。

「実はお前の実力を聞いて来てみたんだが検討違いだな」

「おいおい、人を見かけで判断するなよ。帝王」

俺は眼鏡を外し、男の顔を見ながら笑つた。

「良い度胸じやねえか」

「てめエこそ、体だけでしたなんか言わせねエゼ」

「かかつてこいよ」

その時、半額神がシールを這い終えて戻つて行つた。

「バトルの時間だア」

俺は弁当売り場の近くに居た男を帝王に向け殴り飛ばした。

「ほお、それがお前の武器か」

男は余裕な態度で聞いてきた。

「それはなア、見てからのお楽しみだアー！」

そこから素早く割り箸を四本取つた。

「そんなこともできるのか、新人」

「あアん、俺はなそこら辺に居る二下の犬共と一緒にするなよオ」

「威勢だけは認めてやるよ」

男は力ゴで攻撃を防いだ。

「ここからが俺様の時間なんだよ」

俺は四本の割り箸を器用に使いながら攻撃を仕掛けているがどれ

も上手く防がれる。

「本氣でこいよ。犬」

俺はブチ切れた。

「誰に向かつて言つてんだア！」

四本の割り箸を投げフェイクに使つた。

「そんな攻撃」

力ゴで防御の体勢に入ったのを見て、素早く相手の横に走りこんだ。

「名は伊達じやないな

「褒めるなよ」

俺は殴りかかつたが相手も簡単には殴らしてくれないのか、割り箸の攻撃を力ゴで防ぐ事を止め、こちらの方に体制を整えた。

「吹き飛べ！」

俺の拳は力ゴを吹き飛ばしただけだった。

「やるな」

「褒めるなよ」

そこからはただの殴り合いになつたが相手の方が力強いせいいかこちら押されていた。その時、男は口を開いた。

「弁当は残り一つだ」

俺はこいつが何を言うのかが分かった。

「共闘でもするか」

「乗つてやるよ」

俺は男との戦闘を止め、残った弁当を手に入れるために他の連中を潰しにかかりた。

「おい」

「一人とも弁当を買い終え、俺が帰ろうとしたら声を掛けられた。

「何だよ」

俺は戦闘中の口調で返した。

「お前は面白いな」

男は笑いながら言つた。

「お前もな」

俺も笑つた。

「お前、俺の計画に参加しないか

「計画?」

「そうだ、お前が必要な物だって知ってるんだぜ」

男はそう言って、一枚の紙を出した。

「それをどこで」

俺は焦つた、誰も知らに事をこいつが知つていたから。

「どうだ?」

「拒否権は俺にはないだろ。良いだろ、だかな一回だけだ」

「これが俺の連絡先と部下の番だ持つてろ」

俺は男と赤外線で連絡先を交換した。

「俺の名前は遠藤 忠明だ」

「俺は紺音 樞莉だ」

俺達は握手をしてその場から去つた。

「バイトに送れるかも」

俺は携帯のディスプレイを見ながら呟いた。

帝王（後書き）

これで、二巻の介入作戦は成功しました！

ガブリエル・ラチュエット（前書き）

思いつきで書いたものなので暖かい日で見守って下さい

ガブリエル・ラチュエット

昨日のバイトは走り込みセーフだったが、オーナは「たまには遅刻ぐらいしろ」と怒られてしまった。コンビニのバイトも終わり寮に帰ると思うがここから違うバイト先に向かった。

「来ましたよ」

僕は今は古い横にスライドさせる扉をスライドさせ中に入った。

「一分も遅刻してないね」

女のは時計を見ながら呟いた。

「僕の分はコレですか」

僕は新聞の山を指さしながら言った。

「残念ながら今日からこっちよ」

女の人気が指したのは二地区分の新聞だった。

「多くないですか？」

僕は新聞の山を見ながら言った。

「往復すれば問題なし」

体力がもつわけないよ。

「大丈夫、君のは今日からMTBだから」

女的人は奥の部屋から整備されたMTBを持ってきた。

「これで行くんですか」

見た目は普通だがこれは2・3年前の物だと一瞬で分かった。

「よろしく」

女的人は新聞の山を四つにわけ、その一つを僕に渡した。

「命運を祈る」

死亡フラグを建てないでほしい。

「分かりましたよ」

僕は新聞の山を青い袋の中に詰め、MTBにまたがった。

「行きますか」

MTBはすぐに加速して、車に負けないスピードで駆けて行つた。

「本当にあの子は足だけは怪物ね」

女はたばこを口にくわえながら呟いていた。

朝の新聞配達が終わり学校に来たら、洋の怪我が増えていた。

「スーパーに行つたのかい」

洋は元気のない顔頷いた。

「何があつたの？」

「言つても信じないからいいよ。それより、櫂莉も怪我してないか」
洋は僕の左頬の貼つてあるシップを指差した。

「バイトで堅い物にぶつかつたんだよ」

それは嘘だこれは帝王の拳が当たつた場所だ。

「痛そうだな」

「今は痛くないけど、そのうち洋もたくさんできるから覚悟してると良いよ」

「意味が分からん」

「今は分からなくていいよ。まだね」

僕はそのまま席に着き放課後まで授業を受け西区に足を運んだ。

「君が僕を呼んだのかな」

スーパーの近くに片方にピアスを付けた男が居た。

「お前が狂戦士か」

「君がガブリエル・ラチュットかい。思ったより普通だね」

「お前こそ、思つたよりひ弱に見えるな」

僕はニヤリと笑いながら言った。

「それで、俺に何の用だ？」

「お前に俺達の為に仕事を何個かやつてもらいたい」

「話を聞こうか」

男は一枚の紙を渡してきた。

「コイツはお前の幼馴染みなんだ」「

その写真は金髪で眼鏡を掛けた女だった。

「そうだな、それで」

俺は男を睨みながら言った。

「この女と夕餉の弁当争つてもうおいつて思つてな
断つたら脅しで何かが来るな。

「俺に何をしようと」

「勧誘だよ」

「それなら、お前たちでしろよ」

それぐらいは自分たちの力でしろよ。

「お前は自分のエリアが無いのなら別にいいだり」「
エリアなんて俺には関係が無いからな。

「俺はまだ、関わりたくない」

「これはあの人からの命令だ」

「接触するだけじゃ駄目なのか？」

「それも考えているが戦闘を一回した方が相手も納得がいくだろ」

「俺にはそんな戦闘力なんてないぜエ」

「俺の目には嘘は通用しないぜ。それにお前が参加しないならあの話は無かつた事になるぜ」

「つー」

嫌な連中だな。

「場所はここだ」

俺は地図を貰い嫌々頷きスーパーがある場所に向かって歩き出した。

「俺つてこんなことの為にこんなことを始めたんだっけ」

そんな事を呟きながら歩いて行つた。その後ろでは男が呟いた。

「駒は駒らしく頑張つてくれよ」

ガブリエル・ラチエット（後書き）

一巻の内容に入る前に『湖の麗人』が出てくることになるとは一生の不覚！

湖の麗人

俺はスーパーに来たがなんだかすごい目で見られている。

「（このマスクはそんなに目立つか？）」

俺はタイガーマスクを被っています。このマスクはカッコいいだろ！ そんな事より時間までに麗人が来ているか探しておくれ。

「あ、アイツ誰だ」

「あんなマスクいまだきするのかよ」

やつぱりこれは駄目なのか？ それより、いた！

「（今は声はかけれないが終わってから話しかけるか）」

俺は女性の半額神通称マツちゃんがシールを張り終え戻るときの一礼をしていた。

「（さて、行くか）」

俺はいつも声を張り上げるがそれをしたら一瞬でばれてしまって無言で暴れることにした。

「この、マスク野郎」

後ろから男が殴りかかってきたがそれを簡単に避けそのまま顔に膝を撃ちこんだ。ここの中は弱いな、早く麗人と接触しないとな。

「雑魚は引つ込んでろ」

俺は小さく咳きながら周りの犬共を蹴散らしていく。

「あんた、何者」

ここで、著我がこちらに来た。ばれないように声を変えた。

「私は何者でもない、ただの狼だ」

そう言って、著我との距離を縮めて鳩尾に殴りかかったが割り箸でその拳は止められた。

「やるな

「それはどうも」

割り箸で拳を弾かれて片手がフリーになった。

「そこ」

著我は大勢を低めて足払いをしてきたて俺はそれをわざと受けた。大勢を崩された俺はそのまま床に顔から落ちかけたが床に片手に付けて回転蹴りを繰り出した。

「上手い」

俺はにやけながら片手をばねにして両足を縮め飛び起るとともに蹴りに繋げた。

だがそれも割り箸に止められたが足に自信がある俺にはそれでは防ぐことは出来ない。そのまま割り箸を折つた。

「おやすみ」

着地と共に彼女の鳩尾に蹴りを入れ氣絶させた。

「これで、良かつたのか」

俺は弁当を一つとり、会計を済ませてスーパーの奥に向かった。

side out

私は意味が分かぬマスク野郎と戦つたがその男は私より強かつた。アイツは手加減をしていた。私には分かる。

「ここどこ」

私が目覚めるとそこは私に知らない部屋だった。

「目覚めたか」

ふと声のする方を見たらマスクの男が椅子に座っていた。

「あんた、何者？」

「声で分かつてくれたら嬉しかったよ」

男はマスクを脱いだ。

side out

俺はマスクを脱ぎ捨てた。

「久しぶり」

顔から一滴汗が零れ落ちた。

「櫂莉？」

「正解です」

俺はブレザーから眼鏡を取り出し掛け直した。

「本当にあれがあんたなの」

「嘘をついてもしょうがないよ」

僕はマスクをしまいながら立つた。

「田覓めたのなら出ようか。ありがとう」「そこまではマツチヤン」「僕は著我が立つのを確認して裏口から出て近くの公園に行つた。

「なに」

さつきの事もあり警戒されている。

「警戒しなくていい。あやめに言いたいのはガブリエル・ラチュエットに協力して欲しい。僕的には関わってほしくない」「協力?」

「西区の狼を集めて東区に戦争を仕掛けるみたいだ」

「櫂莉は東区の狼じやないの」

「僕は何所にも属さないんだよ」

「マツチヤンと一緒に繰りか」

警戒が無くなりいつものように話が出来るようになった。

「僕は今回は無理やり参加させられているからあやめだけには忠告しておくれよ」「無理やりなら断ればいいのに」

「それが出来れば後悔しないよ」「よ」

僕は空を見上げながら言った。

「何か弱み握られたの?」

「アイツらがあそこまで僕の事を調べていたのは不覚だよ」「そんなにヤバいの」

著我は心配そうに聞いてきた。

「これはあんまり人に言いたくないから、明日の放課後ここに来た
らわかる」

僕は著我に一つの病院の住所が書かれた紙を渡した。

「なんで、病院」

「来たら分かる。僕は今からバイトだからこそで」

僕はベンチから立ち、ゆっくりと出口に向かって歩いて行こうとしたら著我が叫んだ。

「マスクは無いと思うよ」

僕はその場にこけそうになつたが遅刻しそうだったけど気分は最悪だ。明日、洋で発散しようか。

次の日学校に来てみると、洋は白梅さんに叩かれていた。その洋は僕を見て助けてくれと訴えてきた。

「どうしたんだい、白梅さん」

僕は横から一人の会話に混ざった。

「おはようございます。緋音君」

「おはよう。白梅さん」

洋は僕が来て一安心していたがここから楽しい時間だよ。

「白梅さん、洋を苛めたいのならもつときつとした方が良いよ」とその言葉に洋は固まつた。

「」の教室窓からヒモなしバンジーをさせたらいいと思つよ

「お前は僕の敵か！」

洋は叫んだ。

「僕は人を苛める時は徹底的にって決まってるんだよ」「笑顔で答えた。

「どうだ」

洋は何かを呟いたが僕には全部聞こえてるんだよ。

「それは僕にとっての褒め言葉だよ」

「う、嘘だよね。嘘だと言つてよ。う、内本君助けて

僕は後ろを向いてニッコリ笑つて

「助けなくていいよ」

「白梅さん、これは苛めだよね。助けて下さー」

「緋音君、殺したら犯罪ですよ」

「安心してください。半殺しで止めますから」

「それって、ほとんど死んでないかな？」

「氣のせいだよ、氣のせい」

この後、学校に洋の悲鳴が学校に響いた。 権莉は洋を殴つてゐる間
ずっと笑つていた。

バイトの理由（前書き）

学校が代休だと書くのにもつてこいの時間がたっぷりです。
明日からの学校が嫌になる！ 授業中は小説しか読まないけど

バイトの理由

学校も終わり僕は近くの本屋で女の子が読む少女雑誌を一つ買つて病院に向かった。

「元気にしてたか」

軽い口調で病室の扉を開くと小さな女の子がベットの上に座つていた。

「お兄ちゃん、来てくれたんだ」

そこに座つているのは僕の唯一の家族の妹だ。

「これ、買つてきたけど読む?」

俺は紙袋に入つた雑誌を渡した。

「ありがとう。お兄ちゃん」

妹はいつもこう言つて笑つてくれる。

「今日は体調は大丈夫なのか?」

「お兄ちゃんはいつも心配してくれるけど、平氣だよ」

平氣な物かお前は心臓が悪いんだぞ、ドナーを待つてる意味が分かつていなかからそんな事が言えるんだ。

「それならいいけど」

「お兄ちゃん学校楽しい?」

「面白くないよ、暇すぎて寝てるよ」

寝ているのはバイトで寝る時間が無いためだ。

「勉強しないとダメだよ」

「寝ても理解できるから良いよ」

学校の勉強は教科書を覚えたら簡単だ。

「むう、お兄ちゃんはいつもそればっかだよ」

思い出した、僕たちの引き取り先が決まつたよ
妹は少しだけ気分が悪くなつていた。

「お前がとても懷いていた佐々木さんのとこだよ」

「本当!」

佐々木さん」夫婦は音楽家で滅多に日本に帰つてこない人たちだ。

「ああ、おじさんからこの前電話があつたんだ」

「その時、ドアがノックされた。

「入つてきていいですよ」

妹はドアの向こうに居る人に返事をした。

「失礼します」

入つてきたのは著我だった。

「あやめお姉ちゃんだ」

「久しぶりだね結月ちゃん」

著我は手を振りながら近づいてきた。

「よお

俺は片手をあげて挨拶をした。

「結月ちゃんは入院してましたんだ」

「はい、今年からまた入院しました」

俺は静かに立ち上がり部屋を出ようとしたら結月に止められた。

「どこに行くのお兄ちゃん

「風に当たりに屋上に行く

そのまま部屋を出て屋上に向かつてから一時間後に著我がやって來た。

「どうだつた

「楽しかつたよ」

「そう、良かつた

俺は空を見ながら目を開つてから目を開いた。

「話聞いてた

著我は一瞬おどりいたが答えてくれた。

「聞いたよ

「どこから

俺は鋭い目つきで聞いた

「最初から

「これが俺の弱みだよ

「へ！」「

著我は驚いた。

「アイツの治療費が足りなくバイトして稼いでいるんだけどそれだけじゃ足りなくてそこをアイツらに付け込まれたんだ」「でも」

「引き取り先が決まつても家族になるのはまだ。結月はもう短いんだよ」「それってホント！」

「だから、狼になつたんだ」「ドナーは一回見つかつたんだけど血液に問題があつて駄目だつたんだ」「だから、狼になつたんだ」

「アイツの治療費を稼ぐにはそつするしかないそれ以外になかつた。俺つて本当にダメなお兄ちゃんだな」「そうだね」

「それで、あやめはアイツらに協力するのか。俺はやめといつた方が良いと思うが断つたら他の狼に狙われるから注意しろ。アイツらの頭は帝王だ」「俺は断つてほしかつた。ただそれだけを望んでいた。

「協力するよ」

俺はため息を吐きながら携帯を取り出し連絡をした。

「俺だ。麗人は協力するそうだ」

それだけを言って、一方的に切つた。

「俺は今日から何日間はバイトが入つてるからスーパーには現れないから」

俺は屋上から立ち去ろうとして立ち止まり言つた。

「俺はお前にこの話を断つて欲しかつた。これだけは言つておくよ俺は君が好きだつたよ」

俺は屋上を去つた。

「これからは本氣でやろうかな」

俺はバイト先のロッカールームで両手両足に着いた重りを確認したがら呟いた。

「まずは、あの薄汚いブタをぶち殺してやる」

ロッカーに重りを締まつてゆっくりと扉を閉めた。

「櫂莉君時間だよ」

レジの方からオーナーの声が聞こえてきた。

「分かりました。今行きます」

俺は狼としての誇りをアツを倒す為に全力を出すことを決めた。

バイトの理由（後書き）

わあーオリ主が本気になつたよ。これは書くのが楽しくなる！

恐怖の生徒会長

体調管理が出来ていなかつたため、三日間学校を休みその間の生徒会の仕事が溜まつてゐる状態だ。

「お、おはよう。白梅さん」

僕は今とつても会いたくない人に出会つてしまつた。

「おはようございます。それで、仕事の方は片付きましたか?」
僕は視線を逸らしながら答えた。

「体調が悪くて出来ていないんだ」

「怒つていいですか」

「今日、終わるまで残りますのでぶたないでください」
だがそれは遅く、白梅さんの平手を右頬にくらつた。

「おい、ちょっと来い」

俺は少しばかりキレ、校舎の陰に白梅さんを連れて行つた。

「なんですか?」

「何ですかだと、人が優しくしてたら調子乗るなよ」

それを言い終えた瞬間にまた平手をまた右頬にくらつた。

「ぶちますよ」

白梅は平然と答えた。

「ふ、ふふふふはははは」

櫂莉は狂つたように笑い出した。

「お前、面白いよ。本当に笑えるよ」

その瞬間に今度は左頬に平手をくらいその手を握つて殴られた。

「（この人、普通に強いんですけど……）」

櫂莉は何もできないまま殴り続けられた。

「（殴られてるのにこの感覚なんだ！ 悪くない！）」

この場面を陰に隠れて見ていた内本は同志誕生を楽しんでいた。

「なんで、俺が殴られないといけないんだよ」

白梅が去つた後も彼は校舎裏に座つていたら内本が近づいてきた。

「我、同志よ」

最初は意味が分からなかつたが洋からの話を思い出しきと田覚めた自分を仲間だと思ったんだろうが俺は

「ふん」

熱い握手を交わした、あんな良いパンチが気持ちいに決まつてゐじやないか。内本はニヤリと笑い「ようこそ」と咳き俺はその言葉を聞き生徒会室に仕事を片付けに行つた。

「はあ、なんでこんなに溜まつてるんですか」

俺は文句を言いつつ高速に両手を動かした。

「緋音君、ついて来てくれる」

仕事が一段落した時、白梅に声を掛けられ、向かつた先は部活棟の5階だった。

「いじに何の用があるんだ」

俺は優等生の口調を使うのが面倒に普通に聞いた。

「部活の申請書を届けに」

前を歩く白梅は静かに言つた。

「はあ、副会長なんかならなかつたらよかつたよ」

そう言つてゐる間に部室の前に着いきドアを開けた瞬間に田に入つたのは半額シールだつた。

「部活の申請書を持ってきました」

白梅はそのまま椅子に座つてゐる先輩に紙を見せた。その横には洋が居たから手を振つたら寄つてきた。

「どうしたんだ櫂莉」

「生徒会の仕事だよ

「口調、戻したんだ」

「面倒になつたからな。それより、お前はこの部に入つたんだな」
洋は少し嫌な顔になつた。

「ほとんど、強制だよ」

「お互い面倒な上司を持つたな」

俺は慰めの言葉と共に洋の肩に手を置いたら隅の方でパソコンを

女子が「この一人は絵になる、神様良い場所をありがと」 と呟いていたのをスルーした。関わりたくないです。

「それにしてもお前が狼になるなんてな」

「櫂莉は知ってるのか」

「いや、俺はスーパーに行くだけで見たのは数回だけだよ。楽しいか」

洋は真剣な目になり答えた。

「楽しかった」

「そうか、俺もやろうかな」

ボソッと呟いた。

「何か言つたか？」

「いや何も、白梅の用事も終わつたから俺は仕事の方に戻るよ」

「ん、頑張れよ」

「ハイよ」

俺は生徒会室に戻る途中、洋なりの狼よりも強くなるんじゃないかと思つた。

「アイツに何か光る物があるな」

アイツのこれから成長が気になるがこの地区には《ダンドー》に《魔術師》が居るからなそれにあそこに座つていたのが《氷結の魔女》なのが、戦つても見たいな。

「最近行つてながら戦いが楽しみになるじゃねエか」

side out

「先輩どうしたんですか？」

僕は考え方をしている先輩に話しかけた。

「いや、さつきいたのはお前の知り合いか？」

「櫂莉は幼馴染みですけど」

僕は頭に?マークを浮かべた。

「いや、アイツはすごい奴かもしけないな」

「何言つてるんですけど、アイツは昔から体が弱くて激しい運動なん

かしてませんよ」

「その癖に奴の筋肉の付き具合はおかしい」

「そうだろうか、僕は昔から遊んでいたからそこまで見ていないからな。」

今日は短いです

あの日から何日たつただひつ、俺は未だにスーパーに行っていない。行くのを恐れている。

「何やつてるんだろうな俺は」

そんな事を考えていると携帯が鳴った。そのディスプレイには帝王と映っていた。

「何の様だ」

俺は声のトーンを下げるで答えた。

『俺が今言つ場所に来い』

「はあ、意味が分からん」

『來たら分かる』

俺はそいつの言つとおりにスーパーに来たらそいつは洋の頭を掴んでいた。

「コイツがその火種だ」

帝王が洋を投げようとする腕を俺は掴んだ。

「やりすぎだ、そいつはもう氣絶している」

俺は握っている腕に力を入れた。

「お前は裏切るのか

「はあ、意味が分からねエな。俺は一回お前らの為に仕事をしたんだ約束は守った」

「ちつ、ここで戦うか」

「それはいい。誘いだがお前とは最高の舞台で戦いたいねエ」

俺は回し蹴りを入れたがそれはアイツの足によつて止められた。

「戦線布告の合図で良いんだよな」

帝王はニヤリと笑いながら言った。

「残念だったな。俺は野良犬なんでな」

俺は足を退きその場から去りつとしたら魔女に止められた。

「待つてもらおうか」

俺は振り返りそのまま床をよく見ると、うちの女子の制服を着ていた洋がいた。

「服か

俺は鞄の中に入っていたバイトの制服を投げた。

「コイツを貸すよ」

「お前に話がある」

「俺は話なんかないから帰るよ」

「お前はどちらの味方だ」

「どーだろうねエ、俺は野良だからな」

俺は野良の所を強調しながら言った。

「なら我が部に「入らない」「

最後まで言う前に断つた。

「俺は野良だから誰ともつるまないし誰とも今後協力する気はない。俺は次の戦いでこの世界から去るからな」

次の日はアイツの手術の日だからな、俺はこの世界からは消える一生な。

「教えて欲しい、なんでそうなったんだ」

「著我が話に入ってきた。

「イタリアに行くんだよ」

「イタリア?」

「引き取り先の人が今度イタリアの音楽団に行くことになつてな、それについていくことにしたんだよ。ここには何も未練もないからな」

俺は今度こそ出口に向かつて歩いて行つた。

「あんたまでここに来ているとはな『魔術師』」

バイクにまたがった状態で話し掛けてきた。

「最後の戦いなら俺に協力してくれないか」

「あの豚をやるのか」

『魔術師』は頷いた。

「それなら、俺は最初からやるつもりだった。それにあんたが入つ

たら勝機は確実だと言つてもいいがこれは俺の戦いだ、手を出さないで欲しい

「いや、アイツに借りがあるのは君だけじゃない」

「分かつた、俺はあんたとの協力に乗る」

「ありがと」

その言葉は俺の心に響いた。この言葉は妹以外の口から聞くのは久しぶりだった。

「勘違いするな、たまたま標的が同じだつただけだ」

俺は帰宅した、奴との決着の為に。

裏切り（前書き）

—思ひに殺してくれえええええ！

裏切り

「うーんに呼び出して、何のつもりだ」

俺は朝早くに洋から連絡を受けて公園に行くと他の狼たちが居た。
「お前のところにもこんな紙が来ただろ」「魔女が話しかけてくだが俺のところには来ていない。

「俺のところにはメールが届いた。内容は『裏切り者にはお灸を添えてやる』だったかな」

あのメールは受け取つてすぐに消したから覚えてないや。「それに俺はお前らとなんの関係を持たないから帰るよ。これでも忙しいんだよ」

そう言つと他の狼は俺を睨んできた。

「何だ、お前たち俺とやるのか？ 俺はお前らとはやる気がないから安心しろよ」

その後、学校を休み病院に直行した。

「結月、体調はどうだ」

俺は手術前の結月は笑顔で答えた。

「大丈夫だよ」

その時、病室のドアが開き入ってきたのは佐々木さん夫婦だった。

「どうも」

俺は一礼した。

「まだ、アメリカに居たんじゃないんですか」
俺は疑問をぶつけた。

「今日は手術の日だから来たんだよ」

おじさんはニツ「リと笑いながら言つた。

「本当は心配でしたんですね」

おばさんは手を口に当てながら言つた。

「ありがとうございます」

俺はまた礼をした。

「もう、そんなよそよそしい態度はどうなくていいよ。家族なんだから」

おじさんはそう言って俺の方に手を置いた。その手には今まで無かつた温かみがあり、嬉しかった。

「はい」

俺は泣いていた。「この口がとっても大切なものになつたのを確信した。

「櫂莉君はここに残つてもいいのよ」

おばさんが言った。

「いや、俺は行きますよ。結月が心配だから」

「お兄ちゃんは心配性だからそれが治るまではここに居てね」

「そうか、お前は俺に心配される年じゃないって証明したいんだよな。分かった。」

「いいよ、俺はここに残るよ。心配な奴は他にもいるからな」

「脳裏には洋の事を思った。アイツはバカだからな。」

「お兄ちゃんはやっぱり心配性だよ」

「時間だし、俺は行くよ」

時計を見ると夕餉の戦いが始まる時間が近かつた。

「行つてらっしゃい」

俺は「行つてぐる」「めでたし」と言つて出て行つた。

俺は病院に停めていた自転車にまたがり漕ぎ出した。しばらくするとバイクに乗つた連中が俺の方によつてきた。

「お前にここから先には通させねえよ」

バイクに乗つていた男たちは片手に警棒を持ち殴つてきたが俺はそれでもこゝぎ続けた。

「何だよコイツ化け物か！ 結構、血を流してるとピクリとも動かねえよ」

「コイツ本当に人間かよ

「でもよ、こいつはとつておきのサンドバックじゃんか」

その間も俺は頭、腹、背中を殴り続けられた。たまに鈍い音が聞けたが俺はここで止まっている場合じゃないんだよ。

「コイツで終わりだ！」

男の一人が警棒を振り下げた瞬間、俺は片足でバイクを蹴った。その瞬間、男はバランスを崩し転倒した。

「お前ら、俺の邪魔してんじゃねエよオオオオオオオオ」

俺は自転車テクの一つでジャンプして回転しタイヤを男共の顔面に叩き込んだ。

「コイツ、何でこんなに元気なんだよ」

男の一人が呟きを聞き答えた。

「俺の血を騒がしたのお前らだろオ」

「あ、悪魔だ。こいつは鮮血の悪魔だああああああ

男の叫び声は聞こえなくなった。

「次は殺すからな」

俺は自転車を漕いだ血で真っ赤になつたことは気にしないで。
「着いた」

俺は自転車から降りると周りの人間は驚いていた。今、俺の格好はどうなつてるんだ。そんなことはどうでもいいそれより俺は豚との戦いが待ってるんだよ。

俺は歩く足はお惣菜・弁当コーナに自然と行つていた。

「くそつ、視界がおかしくなつてきたか」

やつぱり、血を流し過ぎたか。視界がぼやけて前に進めているのが心配だ。

「あそこに居る巨体はアイツしかいないよな」
微かに見えた姿はあの醜い豚だと分かつた。

「ハロー、遊びに来たぜ。パッドフット

著我に当たりかけたカートを片手で止め挨拶をした。

「お前までその名で呼ぶか」

「来いよ、今回は手加減しないぜ」

俺は片手で掴んでいたカートを両手で掴み投げ飛ばした。

「これでお前の武器はない。ここは拳一本でやるうや」

俺は素早く殴りかかり右頬に一撃入れた。

「俺にそんなボロボロな体で勝てるのかよ」

「俺に不可能の三文字は存在しないんだよ。努力したらなんでもできるんだよ」

俺は力いっぱい床を蹴りその勢いに任せ蹴りを入れた。

「そんな物」

帝王はその攻撃を片手で防いだが後ろに数歩下がった。

「あーやっぱり、血を流し過ぎたかこれは俺一人じゃ戦えないなー」

俺は後ろに居る三人に聞こえるように言った。

「なら、参加しようかな」

著我が近くに寄ってきて言った。

「お、俺も参加するよ」

洋は立ち上がり膝に手を置きながら言った。魔術師はボロボロな体で寄ってきた。

「なら、やるぞ。あの豚を倒すぞ」

俺が最初に駆け出し殴りかかったがカウンターを決められ鼻血がでた。

「大丈夫か」

魔術師は近くに来ただが

「お前の方がボロボロのくせに人を心配するな」

「お前の方がボロボロだぞ」

と洋が言った。

「そんなに酷いか」

「髪が真っ赤になってるよ」

著我が言った。

「そんなに頭から血出したか」

俺は頭をかいたが感覚が無い。これは酷いな。

「さつさと終わらせようぜ」

俺はそんな事を関係が無いように言った。

「それでこそ耀莉」

著我は俺の背中を叩いた。

「そんな事より早く夕餉を楽しもつぜ」

俺は立ち上がり走つて勢いをつけて飛び上がり蹴りを叩き込んだがその攻撃も片手で防がれた、俺は欠かさず着地しラッシュした。

「これだけと思うなよ

俺の方を踏み台にして著我が飛び蹴りをした。

「そこ」

俺の後ろから洋が出てきて力いっぱい殴りかかった。

「かかつたな」

俺は帝王の片腕が動くが見え、それを止めるために皿ひんのパンチを受けた。

「洋、後はお前に任せた」

俺はそこで倒れこみ意識を失った。

「俺の部屋じゃないか」

田を覚ますと自分の部屋に居た。

「頭に包帯が巻かれてるわ」

俺は左手が動かないで右手で頭に触ると包帯が巻かれており、右手にも包帯が巻かれていた。顔にはシップなどが貼られていた。

「俺つてどんだけ、怪我したんだよ」

そろそろ、左手が動くと思ったが重くて動かない。

「どうなってるんだ。呪われてるのか」

それにして布団が盛り上がってるような

「まさかね」

布団をどけてみると著我が俺の左手にくつ付いて寝ていた。まで、こんなのはあつた、洋の家に泊まつた時よくあつたがこの歳ですることか。

「おー、起きる」

俺は右手で著我の頭を軽く叩いた。

「あ～おはよ～」

寝起きなのかとつても軽い挨拶をされた。

「おはようじやねえよ。なんでここに居るんだよ」「せつかく運んだのにその態度はなこ

「お前が俺をか、よく持てたな」

「佐藤が手伝ってくれたからな」

「ああ、そつかい」

そうしてると著我は改まって聞いてきた。

「本当にイタリアに行くの？」

そんな事言つたな俺

「その事が俺はここに残ることになった。心配な奴らがここに居るからな」

俺はため息を吐きながら答えた。

「もしかして、佐藤のこと」

「それもあるが、お前もその中に入つてゐるよ。てかお前が心配だ一
番」

今の言葉を思い出すと俺何言つてるんだ

「い、今のは無しだ。今のは全く違う。心配なんかしてない」

俺は顔を真っ赤に否定しまくった。

「ありがとう」

「へえつー」

俺は焦つていて聞こえなかつた。

「櫂莉の本当の気持ちを教えて」

俺の気持ち

俺は著我の両肩を掴み答えた。

「俺はお前が好きなんだよ。この気持はお前だけにしか抱いたこと
はない」

「／＼／＼」

著我は真っ赤になつた。

「俺はお前を守りたいんだよ」

俺は自分の気持ちを全部吐き出した。

「あ、ありがとう」

著我は照れながら返事をした。

「もう、秘密を一人で抱え込まないでよ」

「ああ、分かった」

俺はこの日、体が軽くなつた気がする。

丸富大学付属高校会議室

俺は見たくもない物を見させられている、それは洋がパンツ一枚で走り回っている物だった。

「（何やってるんだ）」

俺は田で洋を睨んだ。何で俺がここまで来ないといけないんだよ怪我が治つてなくて痛いんだよ。

「その事ですが」

白梅が映像を見終わった瞬間に口を開いた。

「そちらの著我さんも学校に不法侵入されていますが」

……えーっと、俺が学校に来て無い時どれだけ変なことが起きたんだ。

話し合いの結果は両者の謝罪によつて終わった。

「よろしければ学校の方を案内しますが」

向こうの生徒会長らしき人が話しかけてきたので

「どうしますか、ここはせつかく來たので案内されてみてはいかが
かと」

俺は丁寧な口調で聞いた。

「そうですね」

「それなら案内させてもらいます」

ふう、副会長の仕事って両面に丁寧に接さないといけないからな
「自分は部活動の見学でもさせてもらつてもよろしいですか」

俺は眼鏡をくいつとあげながら言った。

「分かりました」

白梅と離れたいからなこれは良かつた。

部屋を出る際に俺と洋は著我に連れられファミリー・コンピュータ部に行つた。

「はあ、やつと素に戻れる」

俺は眼鏡をとつた。

「凄いな、そのギャップ」

洋は俺の姿を見ていった。

「はア、何言ッてんですか俺はこれが素なんだよ

「なんでキレ気味なんだよ」

「あアん、変態に言われたくないな

「僕のどこが変態なんだよ」

「女子の服でいたとこ」

真っ直ぐな髪を乱して全部後ろに上げた。

「それは、いろいろ訳があつたんだよ」

「変態に意味なんかないと思うけど」

「だから」

言いかけたとこで著我が邪魔した。

「ほり、喧嘩しない」

「ちつ、勘弁してやるよ」

「なんで、著我の言葉を聞くんだよ」

「別にいいだろ」

「それより、そろそろ夕餉の時間だし行かない

「りよ　かい」

「その怪我で戦えるのか」

洋は俺の怪我を見ながら言つた。

「こんなもん怪我に入らねえよ」

「さすが」

と言つて著我は俺の背を叩くが正直に痛い。

「それよりいこうぜ」

俺が言つてそのままスーパーに向かつた。

「それにしても、今日は多くないか

「そうだな」

「今日は見る限り多い。

「関係ないがな」

俺はニヤリと笑いながら今回の戦いを楽しみ待っていたら男が一人近づいてきた。

「お前が噂の佐藤か」

「え、そうだけど」

男が洋に話しかけていた。

「僕つてそんなに有名なのかな」

「噂で聞いたがお前の二つの名が出来ている、そこの横に居る奴もうだが」

俺も、俺はもう二つの名なんだがな。

「教えて、僕の一一つ名を教えて」

洋は喜びながら聞いた。

「《変態》だ」

「へ」

洋の顔は唖然としていた。

「横に居る奴は《鮮血の悪魔》だ」

それってバイクの男が最後に呴いた名前だよな、興味ないな。

「だれだー僕の名を変態にした奴は」

洋は絶望に満ち溢れた声を出していた。

「五月蠅いな」

俺は洋の隣から離れ著我に近づいた。

「知つてたのか」

「知つてたよ」

平然と答えられたのはムカつく。

「俺の名が変わったんだが知らねえか」

「櫂莉のは私は知ら無いけど、あの戦いを見ても悪魔には見えなかつたけどな」

「それは普通にありがたいが俺の名つてどうなるんだろ?」

「たぶん後者の方で知られるんじゃないの」

「マジかよ。ダサくないか」

「前の語呂が悪いし今のが良いんじゃ なーの
はあ、しょうがない。一階堂見つけたりしまくか」
そう言つてると一階堂が現れた。

「それについては謝る。それは俺の部下がやつた事なんだ
「そうか、なら一発殴らせる」

「それは勘弁してくれ」

「勘弁して欲しかつたら、洋の一いつを広げろ」

「それなら良いだろ」

一階堂は親指を立てて答えた。

「よろしく頼むよ」

その辺は雑談をして弁当を取つて終わつた。

セガサターン！

次の日学校の生徒会室で書類の片付けをしていると洋から連絡が来た。

「この電話は只今使われていません。御用のある方は人生をもう一回やり直してからご連絡してください」

「白梅に丸富付属から二人来るって言つといて」

俺のボケはスルーですか。

「分かった。俺も仕事終わらせたらそつちに行くよ」

「先輩に言つておくよ」

電話を切り書類から手を離し白梅に話しかけた。

「白梅さん、丸富から一人」ちらに来るみたいです。と言つてもH

P同好会に来るみたいです」

「分かりました」

白梅はそう言いながら高速に手を動かしながら書類をまとめていた。

「それにしても多くないか」

俺の前には書類の山が二つ目の前にそびえている。

「早く終わらせるか」

また、書類に手を書き始めた。

「先輩、櫂莉も来るそつそつです」

「奴も来るのか」

先輩はイスに座りながら言つた。その時、扉が開いた。

「來たぞ」

「連絡して一分しかたつてないぞ」

「俺の仕事率を嘗めるなよ。一般の人間はニュー・タイプには勝てないんだよ」

「何でガンダムなんだ」

「口ボジトの代名詞だから」

櫂莉は笑いながら言つていた。

「そうだ、コレを渡すよ」

櫂莉はポケットから一枚の紙を先輩に手渡していた。

「これは本当か」

先輩は喜んでいた。何をしたんだ櫂莉

「これからよろしくな。洋」

何がよろしく何だ?

「分からなかよ。俺もこの部に入つたんだよ」

「本当か!」

「ああ、そつだがテイショん高くないか」

「だつて、男がこの部に入るのがこんなに嬉しいのが当たり前じやないか」

「何で嬉しいんだ」

櫂莉は困った顔をしていた。

「だつて、幼馴染みなんだぞ」

「それが?」

「嬉しくないのか!」

「あんまり」

「櫂莉は嬉しくないのか」

「お前はこれが趣味だつたのか」

そう言つて櫂莉は手の甲を頬の横に添えた。

「断じて違う!」

ここでそれは爆弾だ、後ろで白粉が喜んでいるじゃないか止めて
くれこれ以上、白粉おじらいのネタを増やさないでくれ、そしてお前の小説
入りは確定したぞ。

「初めての眼鏡キャラ來た

もう喜んでるよ。櫂莉、一緒に地獄に落ちようぜ。

「何か知らんが断る! 俺はこの眼鏡は伊達だからな。そして、受けじやない攻めだ」

それこそお終いだ

「さすがです、これは書きこたえがあります」

白粉は櫂莉に近づいていた。

「妹がファンなんだ、面白い物を期待してるよ
今なんて言つたんだ、僕には聞こえなかつた。

「知つてるんですか」

「妹が病室で暇だったからパソコンを持つていつたら自分でそのサ
イトに行つて読んでいたよ」

「これは嬉しいですね」

白粉興奮していた。

「良かつたら洋のあんな過去やこんな過去を教えてあげるよ
櫂莉はそう言つて何枚かの写真を白粉に見せていた。

「凄いです。このアングルなんかとつてもいい」

「素晴らしい作品の為なら情報提供は惜しまないよ
感謝します」

何だか僕の目の前で熱い握手をしていた。

「それにしてもお前が群れることを選ぶか

「この部に入つていたらあんたの弱点を探れるからな
「それは嘘だな」

「いやあー俺つて嘘が下手なんですよ

「そろそろ僕を会話に入れてください。

「部活と生徒会のかけもちは大丈夫なのか」

「心配してくれるのはありがたいですけど俺はバイトのかけもちを
してましたからこれぐらいはできますよ。勉強もそうですが」

櫂莉は笑っていた。

「なつ、お前は知つているのか

「どーでしょうねー」

「なんかこの二人仲がいいんですけど、早く誰かこの空気をじつこ
かして。

その願いが届いたのか部室の部屋が開いた。

「きたよ。佐藤」

著我とあせびちゃんがやつて來た。

「よひ、あやめ」

櫂莉は後ろを向い挨拶をした。今、あやめ（・・・）って言わなかつたか、いつもの櫂莉なら著我つて言つのに。

「どうしたんだ、櫂莉身も心も生まれ変わったのか
櫂莉は何の事だみたいな顔になりやがつた。

「どうしたんだ、いきなり。気持ち悪い」

「だつて、櫂莉が著我つて言わなかつたから」

「それぐらいで驚くなよ。人間いつかは呼び名も変わるんだよ
「へえー櫂莉つてそう思つていたんだ」

著我がジト目で櫂莉を見ていた。

「いや、こ、これは言葉のあやであつて、すいませんでした
櫂莉は綺麗なジャンピング土下座をした。

「よひしー」

著我は笑いながら許していたけどこれは何？

「僕の知らない間にここの一人に何があつたんだ
「それはまた話すよ」

櫂莉はそう言つて著我と話始めた。一人の距離近くないか。

「……櫂莉、お前は僕を裏切つたな
「ちつ、気づきやがつたか」

舌打ちしながら僕から遠ざかろうとしていた。

「どうしたんだ二人とも」

先輩は意味が分からぬのかどう対処したらいいのか困つっていた。

「櫂莉は僕との約束を忘れたのか
「お前との約束なんか守るなんて嫌だね」

「何だと！」

僕と櫂莉は「口をくつつけながら言いあつていた。

「大体、お前に彼女何んかできるか

「そう思つていられるのは今のうちだ。夏休みなれば時間なんかい

つぱいあるんだその間に見つけてやる」

「言つたな、もし見つからなかつたらなんか奢れよ」「良いだろう。その代り見つかつたら櫂莉も奢れよ」

「牛乳瓶一本奢つてやるよ」

「それは奢るのカテゴリーに入つていない」

「なら、今からここで勝負するか」

「良いだろう」

「なら、セガサターン持つて来いよ」

櫂莉は俺の肩を叩いて笑つた。その後ろでは先輩に負け続けていた

た著我の姿が

「佐藤まじで、セガサターン持つてきてくれるのか」「著我は僕たちの話にくいついた

「嫌だ」

「なら、お前の二つ名ばらすぞ」

「本當か佐藤お前にも二つ名が出来たのか」

先輩は喜んでいたがここで言われたらアウトだ。

「行つてきまーす」

僕は走つて取りに行つた。

その結果、負け続けていた著我は先輩に無双していた。

「やつぱり強いな」

櫂莉は僕の横で呟いた。

「まあ、それもそうだよな。親父といい勝負するからな」「勝てるか、洋」

「僕じゃ無理だ。櫂莉こそどうだ」

「言つまでもない」

バトルが終わり先輩は僕に質問をしてきた。

「佐藤これはどれくらいするんだ」

先輩もやるのかなと思つて答えた。

「四千円ぐらいです」

「そりゃ」

「といって先輩は「一ドを抜いて窓を開けて僕の制服を投げたようにセガサターンを投げた。

「セガサターン！」

僕は窓から飛び降りた。

「ここは五階だぞ！ アイツはバカか。 急げば間に合つた

櫂莉の咳きは聞こえなかつた。

お前も来たのか（前書き）

目が！　目がああああああああああ！
的な状態に陥っている作者です。
続きを読む

お前も来たのか

洋の奴が部室からダイブしやがった。

「なにやつてるんだ、あのバカ」

俺は急いで部室を出て死体処理に向こうとしたが、

「何で、こんなとこにバナナの皮があるんだよ」

俺は急いで階段を降りて四階に降りようとしたら丁度し字ターンのとこにバナナの皮があつて、滑つて前に落ちていき不幸なことに窓が開いていた。

「俺、死んだよ」

俺はふと考えた、下は確か花壇の土しかなかつたよな。安心した俺だつたが次の瞬間聞きたくない言葉が聞こえた。

「この砂利をここに撒いたし行くぞ」

嘘だろ、今日はそんなんがなかつた……あつたー

「後悔しかないよ」

俺はこのまま死んでどこに行くんだろうな、父さん、母さんのとこに行けるのかな。それでも後悔しかないよ。

「知らない天井だ」

ここが天国なのか、天国は病院なんだな。隣のベットには洋がいるよ。

「起きる。洋」

俺はベットから出て、洋の頭を叩いた。

「いて、なんだ櫂莉か。ここはどこだ」

「天国だ」

俺は普通に答えた。多分、天国だろう。

「僕、死んだの！ 何で櫂莉が居るんだ」

「俺はその後、階段から落ちて窓からダイブしたんだよ」

「ドジだな」

洋が笑いながら言った。

「お前なんかSS^{セガサターン}の為に落ちるなんてな。 プツ」

俺は笑った。

「貴様、笑つたな！ 良いだろ！」でもお前と戦うじゃないか「洋は立ち上がり俺に近寄つた。

「いいだろ。受けて立つ」

俺は洋のデコに頭突きを入れながら言った。

「僕の本気を見せてやる」

お互に殴りかかるとしたとき扉が開いた。

「おーい、大丈夫か」

俺たちはお互いに殴るのを止めてあやめの方を向いた。

「「あやめ（著我）も来たのか」」

俺たちは同じことを言つた。

「はあー何言つてるの」

あやめは呆れながら言った。

「自分が死んだと思ったの？」

俺と洋は頷いた。それはそうだ俺は四階から洋は五階から落ちたんだぞ。

「死んでいないよ」

その言葉は俺にとつてはとても嬉しくあやめに抱き着いた。

「やつたー！ 俺、生きてる！」

嬉しいな、こんな嬉しいのは久しぶりだよ。

「いつまで抱き着いてるの／＼／＼」

おつと、俺としたことが嬉しすぎて忘れてたよ。

「すまん、生きてる事が素晴らしいつい

「ついで抱き着くんだ」

「違う、本当に嬉しいすぎで」

「本当に」

あやめがジト目で見てくる。

「ほ、本当に決まってるだろ」

「それなら良かつた」

「俺は正直怖かつた。違うことを言つたら死んでたな。

「それより、俺達よく無事だつたな」

「そうだよ

「いや、佐藤は木にぶつかつてセーフなんだけど、櫂利は普通に地面に落ちたよ」

「……なんと言つましたか？」

「俺は砂利に頭をぶつけたのか」

「良かつたな、これでお前もバカの仲間だ」
洋が肩を叩いた瞬間に殴つて撃沈した。

「それが砂利の撒き忘れて助かつたんだよ」

「それなら良かつたよ」

「それで、入院費はタダだつて」

「それはおかしいだろ」

「普通は取るだろ赤字になるや。」

「（）にはあせびのどこで事情を知つてゐるからな」

「もしかして、あの子なんかついてるの？」

「いきなり怖くなつてきたな、あんな笑顔に裏があるなんて。

「コレを見て」

あやめがポケットから取り出したのは焦げた何かだつた。

「何だそれ」

俺は指で指しながら聞いた。

「これはお守りよ」

「それで」

「だから、あせびの近くに居たらこうなつたのよ」

「なんだつてー！」

「嘘だろ、やつぱり何かついてんじゃー、早くお祓いに行かなくてはならない」

俺は急いで携帯でお祓いをやつしている神社をググつた。しかし

「何で近くにないんだよ。近くても県外かよー！」

なんで近くで隣の県なんだよ。

「櫂莉これが現実よ」

俺は何だか現実リアルが嫌いになりそうだ。

「俺、何だか死んでも良かつたと思つてきたよ
俺は窓から空を見上げた、なんで夕方なんだよ。」

オルトロス

入院費が無料だったがそれでは納得がいかなく俺は少ないが出して帰り際に弁当を買って帰る為にスーパーに向かつた。

「ここでもやつてるのか」

俺は病院の近くの地理を全く知らないからここにやつてているのか心配になつた。

「これなら、ジジ様のとこに直行すればよかつたか?」

時間もギリギリだな、今向かつても無理だし今日はここにしよう

か。俺は入つて行つたら、一度見た事があつた姉妹がいた。

「確か、あれは丸富の生徒会の一人じゃないのか? それにあそこ

に居るのは二階堂か」

俺は一人の姿と二階堂の姿を見つけた。

「なんだ、アイツ等も狼だつたのか。人は見かけによらずつてこういうことなんだな」

俺は感心しつつここで争奪戦が行われることを知つた。

「なんだ、お前も来たのか」

ふと、顔を上げると二階堂が側に寄つて来ていた。

「今日は病院の帰りだつたんだ」

「まだ、傷が痛むのか」

二階堂は俺を見ながら怪我を気遣つてくれた。

「学校の窓から落ちたんだよ」

「以外にドジなんだな」

「違う、走つていいたら足元にバナナの皮が落ちていたんだ」

「言い訳だな」

「校則では廊下での飲食は禁止されているんだ。もし、落とした奴が見つかつたら血祭り決定だがな」

「俺はにやけながら言つた。

「お前は敵に回さない方が安全だな」

「心配するな、俺はお前には危害を加えることはない。お前は改心したんだからそれでいい」

「ふん、お前は嫌われているが俺はお前の事を気に入ったよ
あー、俺つて他の連中に嫌われてたんだ。まあ、それはそうだしいいや。

「それより、そろそろ始まるぜ。俺は味噌カツ弁当だな
それだけを言つて俺は弁当コーナーに走つていつた。

「出遅れたか」

一階堂は悔しそうに走り出した。

「そこ」

俺は一番近い相手を殴れ飛ばして少しだけ近づいたら姉妹のアイツ等が来た。

「あなたも狼でしたのね」

「まあな」

俺は笑顔で答えて拳を作り殴りかかった。

「女性でも手加減は無いのですね」

「一人の狼なら手加減したら失礼だろ」

前の俺はそんなことは関係なかつたからな。

「あなたとなら良いバトルできますわ」

「姉さん落ち着いて」

気づくと俺の後ろに妹がいた。

「後ろをとられたか」

この姉妹は力ゴを使うのは上手いな。

「ヤバい、考え過ぎた」

はつと気づいた俺は素早く体をしゃがませ力ゴの攻撃を避けたと思つたら、上から力ゴが頭に当たつた。

「あいては一人だつた。不覚だ」

俺は立ち上がり弁当の棚の近くまで寄り弁当棚を掴み立ち上がった。

「今日は最高に気分が良いよ。最高の相手が見つかったよ。ありが

と、「

俺はこの日一番の笑みで姉妹を見た。

「最高ですか（・・）」

「ああ、最高だぜ。今日は楽しいよ」

「そうですか、それならこちらも手加減無しで行きます」

その後、そこでは凄いバトルが行われた。

「はあ、何とか弁当は取れたか」

俺は味噌カツ弁当を手に入れることが出来たがオルトリオスも弁当を手に入れていた。

「あの、よろしいですか」

姉の方が俺に話しかけてきた。

「どうしたんだ」

「良ければアドレスを交換しません。今後も楽しい争奪戦をするための」

「別にいいぜ」

俺は携帯を取り出しアドレスを交換した。

「妹の方も交換するか？」

俺は妹の方にも声をかけた。

「なら、交換します」

交換して俺は自分の寮に帰ろうとしたがどうにか理解するのか知らない為、一階堂に道を聞いて寮に帰った。

勉強

バイトをしなくなつて朝に余裕ができ素晴らしい土曜の朝が来た。その幸せは一つの「ホールによつて崩壊した。

「携帯がうるさいな」

俺は携帯の着うたによつて起された。

「誰ですか？」

俺は眠気には負けないと声を出した。

『あつ、 権莉おはよ』

声はあやめの声だつた。

「おはよう。で、どうしたんだ朝から」

『勉強教えて』

この声によつて久々のオフは消えた。

「来たぞ」

俺はインターフォンを押して答えた。

『開いてるから、 入つて』

俺は物騒だなと思いながら部屋に入った。

「で、 いきなり勉強なんだ」

あやめは頭を搔きながら答えた。

「いや～ テスト一週間前で勉強ができるのが権莉しかいなくて」

「俺はお前のとこと学校は違うんだが」

「大丈夫だつて、 権莉の頭は凄いんだから」

「あれはタダの奇跡だ。 それに俺は頭はよくな」

本当にだぜ、 授業中は寝てるし（バイトがあつた時は）ノートは一応は取つているが読み直すのがダルイから置き勉してるんだぜ。

「そのくせに全国模試で一位を探るんだ」

努力はしていないんだぜ、 適当に答案に答えを記入したら全問正解して、 表彰されただけなんだ。

「あれはだな、鉛筆を転がしただけなんだ」「記号問題なんかなかつたよ」

「そつだつたかな」

「俺の顔は多分、（・・・）の様になつてゐるに違いない。
「なんで、黙つてるの？」

「…………」

だんだんと近づいてくるあやめの顔になんだか霸氣を感じるのは
氣のせいだよな。

「わ、わかつた。お、教えてやるよ」

「よし、始めよ！」

上機嫌になりやがつた。俺もそろそろ試験に近いんだぞ。
「それで、何からやるんだ」

「これ」

出したのは数学？だつた。これぐらいだつたら教える」とはない
な、そう確信してた。

「本当に俺つて必要ないんじやないのか」

「そりかな」

そう言つてゐるあやめだが、分からなかつたら一瞬でシャーペン

置くのになんで三時間も書き続けてるんだ。

「いー」、教えて

やつと出番だ。

「いーはだな三角比の定義を使つてだな……それにしても進の早く
ないか、俺はまだいーやってないぞ」

「それでも、分かるんだ」

あつ、墓穴ほつた。

「教科書になつてるんだよ答えはな

「いや、教科書見てないし」

「予習してました」

俺は素直に言つと教科書を貰つと一回全部の問題や文章をノート
に写して予習をしていたんだ。すると、授業を聞かなくとも答えが

分かるんだよ。

「仕方がない、今日はあやめが分かるまで付きやつてやる」夕方まで勉強してたらメールがやって来た。誰からだ、ディスプレイを見たら沢桔姉からのメールだった。

『今日はここに参ります』

と地図を添付していた。

「どうしたの、櫂莉

あやめが覗いてきた。

「勝手に覗くな。争奪戦の誘いだよ」

「行くの？」

「あー今日は止めとくよ、お前との約束があるし断つておくよ

『へすまない

』今日は用事があつて行けない。

』次、行くときは言つてくれ、その時は楽しい争奪戦をしようぜ』これでいいかな、送信。するとすぐに戻ってきた。

『へ分かりました。

』次を楽しみにします』

妹の方からメールが返つてきた。

「これで、集中して教えるよ」

その後はゆっくりと丁寧に教えた。

風邪

あやめのテスト勉強を一週間見終わって、交代で俺の学校はテスト一週間前に入った瞬間に連絡が入った。

『風邪引いたみたい』

「分かったから、安静にしてろ」

俺は寮を出てバスに乗つてお見舞いに行つた。

「大丈夫か」

俺はドアを開けながら言つたら服が乱れているあやめが出てきた。

「お、お前なんて恰好してんだよ／＼／＼／＼

「どうしたの照れて」

お前は自分の恰好を分からぬのか。

「それで、出歩いていいのかよ」

俺は目を逸らしながら話しかけた。

「まあ、少し辛いかな」

「それなら、何か作つてやるから寝とけ」

俺はあやめを部屋に戻し、台所を借りお粥を作つた。

「もう少し、塩がいるかな」

俺は味見をしてから持つていつた。

「出来たぞ」

「ありがとう」

机の上に鍋を置いて、お茶碗に少しだけよそつた。

「ほら、熱いから気をつけろよ

「温かい」

あやめは茶碗を持つて呟いた。

「いきなり風邪をひくか」

俺は呆れながら言った。

「何だかさ、テスト終わったら体がだるくてさ」

「まあ、なんだ。辛くなさそうで良かつたよ」

「それにしても塩分強くない？」

「おい、そこは強くても感謝しろよ。その味は俺の家の味なんだよ、証拠に少しだけ和風だしの味がするだろ」

「本當だ、少しだけするよ」

「少しだけかよ」

俺は少しがつかりした。

「嘘だよ、美味しいよ」

あやめは笑顔で言つた。その笑顔は反則だ。

「／＼／＼／＼」

あやめは何にか思いついた表情になつた。

「もしかして、料理を褒められたのは初めてかな？」

「つ！ そうだよ、悪いか！」

「悪くない。その、嬉しかった」

気が付くとお鍋の中のお粥は無くなっていた。

「ほら、薬飲めよ。買つてきたから」

俺はビニール袋から風邪薬を取り出した。

「本当にありがとつ」

「そんな感謝する事じゃねえよ。これは俺がしたくてやつてる事だからな」

「櫂莉つて、シンデレラ？」

「ふざけるな、誰がシンデレラだよ。それと調子乗るなよ

「いいじやん、病氣の時ぐらい我が儘言つたで」

「俺はな、病氣になられると凄く心配になるんだよ。どんなに軽くても死んだりするんだからそんなに調子乗るなよ。だがな、今日だけはお前の我が儘聞いてやるよ」

俺は顔を真っ赤にしながら言つた。

「あ、ありがとう」

あやめも同じく照れた。

「先にお鍋とか洗つておくから、汗かいななら着替えとけよ」

俺は台所に向かい洗い物を済、戻つたら唖然としてしまつた。

「／／／／／

声が出ない、戻つたら丁度着替え始めたあやめと田が合つたからだ。

「す、すまん。」

俺は急いで後ろを向いた。

どうなってるんだ、普通は着替え終わってるのが普通だ。この頃、俺の身近で起きることは何かゲームのイベントみたいだ。

「き、着替え終わつたか／／／／／

俺は後ろを向いた状態で聞いた。

「う、うん。着替え終わつたよ／／／／／

前を向きなおしたら真っ赤になつたあやめがそこに座つていた。

「見て、ごめん」

俺は素直に謝つた。

「別にいいよ。タイミングが悪かつたのもあるしさ」

「いや、見た俺が悪いんだ」

「私だから」

「それだけは譲れない」

その後も自分が悪いなどと言い合つた。

「さて、俺は今日は帰るよ。汗かいたらすぐこ拭けよ」

「分かつてるよ」

「じゃ、テストが終わつたらまた来るから」

「あつ、そうだった。貴重な時間取つてごめん」

「それぐらいで謝るな、俺は勉強しないから安心するな」

「それなら安心した

「それじゃあな」

俺はあやめに近づき不意にキスをした。

「元氣でな」

「／／／／／

あやめは真っ赤になつていた。

土用の丑の日

テストが終わり（結果は白梅と同じ一位でしたが）「この日が来た。弁当の争奪戦が俺の日常に歸つてくるのにいい日だ。

「あの二人には感謝だな」

争奪戦を休んでる間に沢桔姉妹とのメールで美味しい国産ウナギ弁当を売っている店を教えてもらつた。これはとってもいい情報だつた、何よりメールなど誰ともしないので楽しかった。

「さて、行こうかな」

俺はスーパーに向かつて行つた。俺が現れたら全員は嫌な顔をすると思ひけどな、そんな事を思いながらランニング程度に走つて行つた。

「よう。情報ありがとうございます」

俺はスーパーに着いた時には沢桔姉妹が居たので話しかけた。

「あなたは私たちに話しかけてくれるのですね」

「はあ、何言つてんだお前。俺はお前たちがこここの情報を教えてくれたから来ただよ。ありがとな」

なんでこいつはこんなに暗い顔をしてるんだよ。

「感謝などされることにしてません」

「どうしたんだ、何かあつたんなら相談乗るぜ」

俺は事情がどうあれそんな暗い顔をされたらしつちの調子が狂うよ。

「いえ、ありませんわ」

「あるな！ 言つてみろ。俺はお前たちの友達だ。だから、お前が嫌でも俺は聞く、そんな暗い顔をされたら心配するんだよ。言つてスッキリしろ」

俺は姉の方から話を聞いてキレた。なんだよそいつ、あつたら殺してやるうかwww

「そんな変なことかよ。俺なんか他の狼に嫌われるぜ。ほり、そこ見てみろよ」

俺が指を指したところに居たのは俺を見てずっと睨んでいる男だ。
「俺つてさ、性格悪いから人に嫌われやすいんだよ。だから、お前たちが友達になってくれて嬉しかったぜ」

「ありがとうございます」

妹の方が感謝してきたが、姉はビックリしていた。
「おいおい、感謝するのは俺の方だからさ、これから仲良くなってくれよ」

俺は一人に手を差し伸べた。一人は俺の手を握ってくれた。

「あれ、櫂莉来てたんだ」

良い空気を台無しにしたのは洋だった。

「何良い空気を潰してんだよ『変態』」

「僕をその名で呼ぶな！ 櫂莉この戦いで僕は勝つて見せる
良い度胸だな、俺に勝てるってほざいたのはこれで何回目だ」「何言つてゐ、これが初めてだ」

「おいおい、何言つてるんだよ。中学の時に何回も言つてたじょんかよお」

「くそお、櫂莉お前つてやつは何所まで僕を嫌つてるんだ」「お前が俺を嫌つてるの間違いないのか」

俺たちはデコをぶつけて言い合いになつていた。

「もういい、そろそろ始めるから俺は行く」

俺は面倒になりその場から離れて待機した。そして、時が来た。
「始まつたか」

今日はいつもに増して狼が多いそして、嫌な空気が張りつめている。
「ここに来てるんだよな、アイツはよお」

俺は沢桔の話に聞いた奴がどんな奴か知らないがここに来ているのは聞いたからそいつを見つけてぶん殴つて美味しい飯を食つことに決めた。

「どこに居るんだよオ、ヘラクレスの棍棒さんよオ！」

俺は周りの奴を殴りながら暴れまくった。テストで溜まったストレス、テストのせいで溜まった書類の山の格闘のストレスをこの争奪戦で発散して行った。

「どこに居るんだよオ！　俺はお前をぶん殴らねーとヤア、いらいらすんだよオ！」

俺は目の前にいたなり現れた男を何だか勘で、こいつだと思い力の一杯ぶん殴つた。

「あつはーやつぱり樂しいなア、この時間は樂しそがるぜー」
さて、楽しんだところで弁当を探りに行こうか。

「コイツはア、俺の物だア！」

棚の前に居た男を殴り飛ばし弁当を獲得した。

「さて、他はどうなつた」

周りを見ると床に倒れこんでいるのがほとんどだった。

「誰がやつたんだ。これは酷いな」

俺は呟いた。

「ほんどうやつたの櫂莉だ」

後ろから洋の声がした。

「弁当採れたか、良かつたな」

「良かつたよ。じゃない、櫂莉暴れすぎだ」

「コレも一つの戦争だ、俺は手加減なんかしてられないんだよ。アイツに勝負したいからな」

俺は『魔術師』と戦いたかったのにいなかつたことにショックを受けたんだよ。

「はあ、なんで来てないんだよ。でも楽しかったからいいか」
レジで精算を終わらせ帰ろうとしたら、沢桔姉妹がやって來た。

「次はあなたと戦いたいですわ」

「そういえば、戦つてないな。その代り手加減はしねえから

「望むところ」

「じゃ、俺は寮に帰つて夕餉を楽しむよ」

と言つたら姉の方が何か言いたそうだつた。

「どうしたんだ？」

「よ、よろしければ一緒に食べませんか？」

「そうだな、一人で食つても美味しいしな」と言つたら、洋がいつも言つてゐる。坊主、あじひげ顎鬚、茶髪がやって來た。

「なら、一緒にお前も食いに行こ」つぜ」

顎鬚が言つた。

「たまには大勢で食つのも悪くないな」

坊主が言つた。

「ほら、行くよ」

茶髪が言つた。

「はは、これは面白いメンバーだな」

近くの公園で五人で食べたが、顎鬚と坊主はなかなか面白い奴だと思つた。

夏休み（前書き）

そろそろ、テスト期間に入るので投稿が出来なくなります。と言つてもあと数日は書く事が出来ますので。

夏休み

早速だが、俺は今飛行機の中にはいる。いきなりすげてすまないこれが昨日の事だった。

「結月から手紙が来てる」

寮の方に手紙が来ていたので開けると一枚の写真が入っていた。

「こ、これは」

俺は写真を見て固まってしまった。

「嘘だろ……だれか、嘘だと言つてくれ」

そう、写真にはイタリアの少年とのツーショット写真だった。

「い、妹に変な虫が……どうしたらしいんだ」

考える、冷静になれ、相手はまだ小学生だ。ただの友達に決まっている。そうに違いない、俺はすぐに間違える。そうと決まればイタリアに行くか。

「手紙の中になんか入ってるな」

入っていたのは行きと帰りの航空券だった。

「ファーストクラスだと！ しかも、帰りはビジネス。俺の新しい親は子供にどんな体験をさせたいんだ」

手紙には『結月ちゃんに虫が付きそつなんだ！ 何とかしてくれ b x 父』と書いていた。

「よし、よく見たら今日の夜の便だ」

俺は心の中でお義父さんに感謝した。

そして、今に至る。

早く着かないのか、この間にも結月に変な虫がつくかもしないんだぞ！ イライラ、イライラ、してきた。そういうえば強化合宿があつたよな気がするがこの際はスルーだ。妹の方が大事なんだ、争奪戦の為の強化合宿なんて二の次だ。俺の心におっ立つ三本柱は、友情・努力・勝利じゃない。妹・妹・妹だ！ 違う、これじゃどこ

かの変態みたいじゃないか。俺は断じて違う。俺は、シスコンだ！
これじゃ、どこのガンダムマイスターだよ。

「あ、心配するのもいいけど睡眠をとらないとな。最近仕事が多くて睡眠時間が無かつたからな」

俺は携帯を開けてメールを見てみると一件だけ受け取っていた。

「沢桔姉からか」

メールを見ると、お土産よろしくと書いてあった。どうして旅行してるのか知ってるんだ。一応買つていくからいいけど、そんな事より寝よう。

番外編的な物 1（前書き）

Angel Beatsに主人公を混ぜてみました。

俺が目を覚ますとそこは夜の学校だつた。

「は、どうなつてんのこれ」

よく見れば俺は学生服を着ていた。

「那儿の学生服だよ」

寝てもしようがないので、立ち上がり周りを見渡しても、校舎

校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎
校舎
校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎校舎

しか見当たらない。

「どこなんだよ。確か俺は、思い出せない」

思い出せない、俺は何所から来たんだ、俺の名前は緋音……これ以上は思い出せない。

「はあ、どうなつてんだか」

ぼつと立つているのもあれだし、そこら辺を歩いてみるとしたらグラウンドで血まみれで倒れている男がいる。

「殺人現場に遭遇してのか、これは幻想だし。見なかつた事にしょう」

グラウンドに降りるには階段を降りないといけないし、そんなのは疲れるからバスと思つて立ち去る?すると男女が一いつしやつてくる。

「あなた見ない顔だけど、新人」

「お前こそ誰だ、人に尋ねる時は自分から名乗れよ
隣に居る男は顔を青くしていた。

「そうね。私の名はゆりよ」

「俺は緋音だ」

「それって、苗字、それとも名前」

「苗字だと思う」「う

その言葉にゆりは考える表情をした。

「あなた、記憶がないパターンね」

「俺に記憶がないのなら、お前らは記憶はあるのか

「ええ、あるわよ」

女は即答した。

「ここはどこなんだ」

「ここは死んだ世界」

その言葉で俺の中で引っかかっていたものが分かつた。

「俺つて死んだんだ」

「へえ～驚かないんだ」

「あるがままに受け入れた方が容量を使わなくて済むからな」

「あたは頭脳派なのね」

「そんな事より、あそこで死んでるやつはどいつもなるんだ」

「俺が指を指して聞いてみた。

「この世界では死なないからそのうち生き返るわよ」

「ふうーん、それはそうとして。俺とお前らの制服は何で違つんだ」最初から気になつっていたが聞きたい事が多くて聞くことを忘れていた。

「それなら、入隊してくれない？」

「入隊？ 軍隊か、何とか？」

「そんなところね」

「行くあてもないから入るよ」

「ようこな。死んでたまるか戦線へ」

ゆりは手を伸ばしてきたので俺は手をとり握手した。

「そうと決まればついて来て」

ゆりの誘導についていく俺に青髪の男が話しかけてきた。

「俺は日向よろしく」

「よろしくな

「緋苗は記憶がないんだよな」

「ただけど」

「そうか、記憶が戻るといいな」

「その時は名前で呼んでくれよ

「いいぜ」

「なんだか、こことは仲良くできると思つた。

「ちょっとここで止まって」

校長室の田の前で止まつた。

「なんで、止まるんだ」

「合言葉を言わないと怖い罷があるんだぜ」

ゆりの代わりに日向が説明してくれた。

「そうだったのか」

「なし」

力チャヤと扉の罠が外れる音がした。

「ところで、どんな罠だつたんだ」

「それは見てからのお楽しみだぜ」

「面白いわよ」

俺の予想では面白くない、絶対に

「ここが死んでたまるか戦線よ」

その中には数人の居た。

「これだけなのか？」

「他にたくさんいるけどここに来るのはこれだけよ」

「ゆりつペ、そいつが新人か？」

ドスを持つた男がゆりに話しかけていた。

「出会つたうちの一人よ」

「と言うことはもう一人いるのか」

あーグラウンドで死んでたのもメンバーだったのか。

「今頃、回収班が保健室に運んでると思つわ」

「浅はかなり」

今度は隅の方から声がした振り返ると首に長い襟巻をした女がいた。

「ゆり、そろそろ。紹介してくれないか」

「そうね。そこで眼鏡を掛けてるのは高松君ね、知的キャラに見えるけど本当はバカよ。こっちの特徴が無いのが大山君ね。」

「特徴が無いって言うのは失礼じやないか。」

「で、彼は藤巻君ね」

「よお坊主」

「ああん！ 嘘嘆売つてんのか？」

何か知らんが気づいたらそう答えていた。

「次は彼ね、彼は松下君。柔道五段だから皆は敬意持つて松下五段

つて読んでるわ

次の人物に行くときに、バンダナの男が現れた。

「Hey! easy do dance!」

「暇なときにもまた誘つてくれよ」

「隅に居るのが椎名さん。」ひちが岩沢さん、彼女はバンドを組んでるのよ

「よろしくな

「これが制服ね」

「ここでようやく制服が渡された。

「どうも」

俺は制服を渡されたので着ようと思つて服を脱ぎだした。

「ここで着替えるの？」

ゆりが訪ねてきた。

「いや、だつてさ。ここ以外に着替える場所知らないしさ」と言いながらも俺は学ランを脱ぎ捨てた。

「まさかのカツターシャツまで綺麗にボタンが閉められてるんだな」「ちょっと待つて

「どうしたんだ？」

俺はブレザーを着終わつてズボンに手をかけていた。

「目を逸らすから、ちょっと待つて」

「そうだな、男の下着なんか見たくないもんな。忘れてたよズボンを穿き終わつた。

「それにしてもブレザーの方が落ち着くよ

「そうなると、前世はブレザーだつたんだな

「そうだろな、多分」

その後、俺は日向に寮がある事を聞き一緒に戻った。

番外編的な物 1（後書き）

息抜きに書いていきます

イタリア

着いたぞ、イタリア！ 私はここに来たのだ！

「さて、ふざけてないで。家に向かうか」

紙に書かれている住所を探すことから始まつた。なぜ、連絡を入れないのかつて。それは、両親の一人は団の練習、妹は図書館らしいです。

「寂しくないよ。寂しくはないんだ」

ただ、切ないんだ。一人でいるのが

外人と話すときは『』で話をするので『』了承を
そんな事より家の方に向かうか、イタリア語は機内の中でも覚えた
んだ……だがな、住所が分からなんだ、始めてくるんだ分からな
いのが当たり前なんだ。

『姉ちゃん、俺らとお茶しない』

おいおい、道端でナンパつて、日本とまるきり同じじゃないか。
よく見るとあの女見たことがあるな、てか知ってるよな俺……つて
！ 著我じやねエか！ そういうや、あいつ帰省してたんだよな。し
ょうがない。

『おい、くそ餓鬼共何やッてるんですかア！』

俺は近づき男たちに話しかけた。

『何だよコイツ、俺達に文句があるのか』

『ちょっと、こっち来いよ』

俺は三人の男たちに連れられ建物の影について行つて、三分後

『三下共がア、喧嘩売る相手を間違えたなア』

俺は無傷で出てきて少しばかりお金が入つた。

『よオ』

俺は出てきてあやめに話しかけた。

『びっくりしたーいきなり櫂莉が現れたから驚いたじやん』

『それにしてもここで会うなんてな』

「てか、なんでここにいるの？」

俺は真剣な顔になつて話すことに決めた。

「それがな、妹に豚野郎が近づいてるみたいでな、心配で来た」

「そういえば、櫂莉はパソコンだった」

「それを本人の前で言つことか」

「いいじゃん、それより一人なら付き合え

「その前に俺は自分の家に行きたいんだよ

「連れてつてやるからさ、付き合え」

「分かつたよ」

ああ、なんでこうなるのかな。

「それで、なんで男物の服やなんだよ」

「いや、櫂莉の服いつも一緒じゃん」

「同じのが何枚もあるだけだよ」

「それより、たまには違う服でもきなよ」

「分かつたよ。俺、選ぶの嫌いだから聞いてくる」

俺は服を選ぶのが嫌いなため適当に買つが今日は店員に聞いてみることにした。

『すみません』

男性の店員に話しかけた

『何でしううか、お客様』

『服を探してるんですけどおススメの服つてありますか』

男性はその言葉を聞いた瞬間に閃いたのか店の中を走つて服を取つて来てくれた。

『お客様にはこちらの服がよろしいかと』

見せられたのは某魔術小説のアキセラさんの服を渡された。

『これ以外に『ありません!』ですか』

否定できないのか、買うしかないのか、買つたらそこで俺は何かを失う感じがしたが店員が持ってきたものだし買つておくことにした。

「買ってきてぞ」

服を着替えて出てきたらあやめは笑い出した。

「何だよ、櫂莉その服ただのコスプレになつてるぞ」

「田の色は違うからセーフだ」

「何言つてんの、櫂莉の田は赤色じゅん

「そりだつたか」

「もしかして、見たことないのか」

俺は顔を縦に振ると、あやめは鞄から手鏡を取り出し見せてくれた。

「俺の田つて、赤色だつたのかよ」

初めて知った。俺つてもう何も失うものが無くなつたような気がするよ。

「拗ねるなつて、家に送つてやるから」

「最初からそうしてくれ」

「住所見せて」

「住所を見せたらあやめは驚いた。

「どうしたんだ?」

「いや、帰るところが同じで驚いたんだ」

「同じ?」

「そう、同じ」

「そつか、目的地が同じなら行こ」^{ばづ}

「櫂莉、一生のお願い」

しやめは両手を合わせて

「私を止めてくれない」

「はあ、どうしたんだよ」

「それが、パパの私の見る田がね」

「そついえば、この前もそついつ」と言つてたような気がするよ。

「聞いてみるよ」

「助かる」

その後は本当に助かつた、こここの地理が全く分からなかつたから家に着くかが問題だつたがそれも無くなり簡単に家に着く事が出来

た。

「家に誰かいたつけな」

部屋の前に着いたのはいいが開いてるのか、おそれおそれ開けてみると開いていた。

「ただいま」

中に入った瞬間、クラックカーが鳴った。

「お帰り、お兄ちゃん」

「お帰りなさい」

家族はそこに居た。

「ああ、ただいま」

「あらあら、お兄ちゃん。彼女連れて来たの?」

お義母さんが言った。

「何だと! お兄ちゃんは彼女が居たのか

お義父さんは驚いた。

「いつから付き合つてるの?」

妹は質問をしてきた。

「そ、それはいいから」

その後は他愛無い会話をして過ごした。

「あれ、そういえば俺つて何しに来たんだっけ

すっかり当初の目的を忘れていた。

当初の目的を忘れて、俺は家族と普通に過ぐしていた。

「何で、俺つてここに来たんだっけ」

俺は紅茶を飲みながらお義父さんに聞いた。

「そりや、娘に虫が付きそうだと手紙送ったから

「それだ！ すっかり忘れていた。何たることだ！」
俺は何の為にイタリアに来たんだよそれもファーストクラスで

「最高だろ」

「それより、結月の話だよ」

お義父さんはのほほんとした顔から真剣な顔に変わった。

「そうだつたな、これが証拠の品々だ」

お義父さんは引き出しから数百枚の写真を取り出した。

「たくさん撮ってるんだ」

「可愛い娘の写真を撮るのが父の務めだからね」

「どれも可愛いよお」

「そうだろ」

「はつ！ そんな事よりたまに写っているこいつが例の虫か

「そうだな」

「パツとしない奴だな」

外人なんてお兄ちゃんは許しません、日本人なら許します。

「やっぱり、日本人がいいな」

「父さんもそう思つたのか」

「櫂莉もか」

二人は真剣な顔で見詰め合つていた。

「「なんて、話が分かる人なんだ」」

言つタイミング同じだった。

「父さんと俺は考へてる事が同じなんだね」

「ああ、息子よ」

「最高の父だ」

「そうだな、息子よ」

「この瞬間、親子のなかが深まつた瞬間だった。

「その心配はないよ。櫂莉」「

突然と扉が開き、入ってきたのはあやめだった。

「なんで、そう言いきれるんだ」

「結月ちゃんの好みはお兄ちゃんみたいなカッコイイ人だつてさ」「

「それは本当か！」

「何だと！ 父ではなく息子だと？」

父はテイションが下がった。

「この瞬間、俺は今にでも日本に帰つてもいい気がしてきた」

「でも、最近イギリスの人も好きだつて」

「何だと！ くそ、やっぱりあのくそ虫を殺すしかないのか」

（血がつながつてないのにこの反応は面白いwww）

「それに、シスコンなお兄ちゃんは嫌いだつて」

「な、なんだと。俺は死んでもいいのかな、父さん、結月を頼みます」

はは、死んでやる！

「う、嘘だから！ 櫂莉、今のは嘘だから」

「なーんだ、嘘だつたのか！ 危うく、嘘のせいで死ぬところだったじゃないか」

「死ぬのはやりすぎだ。櫂莉は強化合宿行かなくともいいのか？」

「忘れてた。あやめはいつ行くんだ」

「明日の朝かな？」

「ふう〜ん、それなら俺も明日行くよ」

「なら、今日はたくさん遊びに行こうぜ」

俺はあやめに腕を掴まれそのまま知らない街に行つた。

帰国 × 弟奪 × お弁当（前書き）

ハンター × ハンター のアニメのサブタイトル風にしてみました。
アルカ、 可愛いね

日本に帰つてきました！ えつ、そんなの見て楽しむ人はいませんからね。

「それにしても、ここから電車か」

「どうしたのその顔」

「いや、時差ボケでさ睡い」

それにして周囲の目線が俺に集中してるのはなぜだ？

「櫂莉、話しかけをさキレ気味にしてみなよ」

それぐらいならいいけど

「あア、これでエいいかア」

「それでいい、さあ！ 行こう！」

思つたけど、俺つて着替えたけど同じ服をまた買つたんだつけ。

「お前、わざとしたのか！」

「ちつえ、バレタ」

「お前なあ、人がやりたくない事をせんからすぐに分かるんだ」

「それより、早く行こうぜ」

俺の腕を掴んでそのまま寝た。

「はあ～よく寝た！ これで今日は全開で戦える」

「ここでの狙いは沢桔姉が教えてくれた情報ではちらし寿司だったはずだ。

「ここが、佐藤が言つてたペイショնだけどだれもいないじゃん」

「連絡してないからいのが当然だろ？」

「えーこれからどうするのぞ」

「俺に聞くなよ。時間があるし、俺はそちら辺を走りこもつかな地

図も貰つたしルートを考えていたけどここは丁度いい

「バイト辞めても体力トレーニングしてんの」

「お前なあ、俺はもともと体力が無かつたからやつてたんだよ」

「それが今では日課ですか」

「バイトのかけもちのせいでの、体力が必要になつたんだよ。その頃から争奪戦に出てたわけじゃないんだ」

「まじで、理由ってなに?」

「別にいいがそこまで面白くないがな」

そう、春の初めに親を亡くした俺は妹の心配しないためにバイトをしていた。その日はいつもより早く帰る事が出来て腹が減ったからスーパーの弁当でも買って帰ろうとしたらいざ、その時初めて争奪戦を見たんだ。

「なんだ、弁当を争つて戦つてるのか」

俺は目の前の光景を疑つた。人が弁当を争つて殴り合つているからだ。

「やるしかないのか」

俺は人の中に紛れて弁当を巡つて争つた。

なんだ、こいつら弁当に賭けるこの威圧はさ。その時、俺は横から現れた女に殴られた。

「グッハ」

俺はその頃は殴られる痛みをあまり知らなかつたが、そのパンチのせいか俺は心が熱くなるような感覚に襲われ気づいたら楽しんでいた。

「これは俺のだ」

俺はその時、目の前に居た男を殴る飛ばし弁当を手に入れた。

「何だろうな、このすがすがしさ」

最高の気分だつた。

「君つて初めてだつたの」

俺を殴つた女が話しかけてきた。

「そうですけど」

「そななんだ、良かつたらこの世界のルール僕が教えてあげるよ」

俺はレジで弁当を買つて、近くの公園で話しを聞くことにした。

「説明してくれますか」

「いいよ、半値印証时刻ハーフプライスマーリングタイムこれが僕たち争う時なんだ」

「半額弁当を求めてですか？」

「そうだよ、それが僕たちが夕餉を楽しむためだからね」

「それが、この弁当ですか？」

「それにしても、君は凄いね。ビック・マムの店で初めての争奪戦でお弁当を探るなんてね。おいしいでしょ」

確かに美味しい。半額でこの味は美味しいすぎます。

「そうですね。それと、俺の名前は緋音 権莉です」

「権莉君ね。僕はこっちの名前で答えるよ』ガリー・クロード』ヒカル『アーヴィング』

「しくね」

「それじゃ、何て呼べばいいか困りますよ」

「そうだね。僕は山木柚子だよ」

「それにしても、今日は楽しかったです」

「そうだね。僕も君との戦いはあまりなかつたけど、君ならすぐ二つ鉤がつくよ」

「そうですね。バイトが無い日に参加してみます」

「ここに来たら、僕と勝負だからね」

「なら、俺は実力を付けてから山木さんところに来るよ」「勢いで約束をしてしまった。楽しかった、それだけだ。

「なら、その時は両者本気だからね」

「ええ、いいですよ」

「こんな感じかな」

「なら、権莉は戻ったら挑戦するの」

「そうだな。挑戦しようかな、帰つたら

しみじみとしていたら思い出したようにあやめは言つた。

「思つたんだけど、さつきの話を聞いてると権莉はさ『ガリー・クロード』にこいしてるんじゃないのかな」

俺は唖然とした。

「何でそんな答えが出てくるんだ」

「話してる間、櫂莉楽しそうだったから」

「あの人につながったら俺はこの世界に居ないかも知れなかつたし、イタリアにも行っていたかもしない……俺は誰に恋をしたんだ本氣で

「俺は著我を裏切ったことになるよな」

「いいよそんなこと、櫂莉の本当の気持ちが誰にあるのが分かっただけで」

「大学生相手に恋を抱くなんて俺って年上好きなのか」「だとすれば、一階堂に情報を聞くこともできるんだよな。

「そうだ、そろそろいかね」

「著我は思い出したかのように言つた。

「そうだな、この地図によるとスーパーは一つあるけどどうする」

「それなら、バトルしようつか」

「なら、こっちだな」

「俺は地図に書いてある近い場所に走つて向かう」とした。

「さて、行こうか」

「この合宿が終わったら、俺はあなたに挑みます。

帰国 × 弁奪 × お弁当（後書き）

実は違うルートだと！

帰るよ（前書き）

今日からテスト一週間前になりましたので投稿を停止します。ご迷惑をおかけしますがよろしくお願いします。

帰るよ

走り出した俺たちはスーパーについた時には争奪戦は始まっていた。

「もひ、始まつてゐるのか」

「そつ見たい、あそこに居るのは佐藤じやないの」

「コートを着た男と戦つてるのが見えた。」

「他の連中はやられたのか、でもあのコートには何か秘密がある」

「秘密つてなに?」

「夏にコートを着てるんだ。異臭がして食欲が無くなるつてことだ」「腹の虫の加護を減少させるつてこと」

「その通りだ」

今のはアイツはコートを脱いでないのを見てまだ、本気でない事は分かつた。

「著我、手伝つて欲しい事があるんだけど」

「なに」

「佐藤を助けるか」

「当たり前じやん」

俺と著我は佐藤の目の前に現れた。

「助つ人、登場!」

俺は目の前の奴を睨みながら言った。

「さて、弁当は二つこれはどうやつててにいれようか佐藤」

「なら、一つの弁当を僕と耀莉が食すでどうかな」

「まで、そこは早い者勝ちでジャンケンだろ」

「私は佐藤とジャンケンしようかな」

「それは僕が不利だ」

「それで行こうか。俺がアイツを引き付けてやるから弁当頼んだぞ」

「二人は頷いた。」

「俺に勝てるのか」

「一トの男が言った。

「お前の弱点なんかお見通しだ」

俺は素早く男に近寄り蹴った。

「なんで、俺をまともな力で蹴れるんだ」

「それはな、鼻が詰まつていて臭いがしないんだよ」

俺は周りの空気を臭う真似をした。

「やっぱり、臭わないか。早く病院に行こうかな」

「くそ、俺の弱点が初めて見ただけで分かつたのはお前だけだ」

「それは嬉しいよ」

俺はまた距離を詰め殴りかかった。

「んっ！」

「臭いが効かないのなら普通に戦うまでだ」

俺の突き出した右手は避けられたがそれは予想してた事だつたため左手で殴つた。

「ぐつ」

「おいおい、俺の拳であまり動かないのは見たことが無いぜエ。おい、洋！ あれやるぞ」

「いじでするのか」

「いじならア、二人ぐらい余裕だア」

「分かつた行くぞ」

洋と著我は俺の方に走り出した。

「三人で来るのか」

「それはあめエなア」

男と俺の距離があまりない状態で、洋と著我は俺の肩にジャンプしてそれを踏み台にして、またジャンプしてお弁当の棚まで行つた。

「残念でしたア」

「くつそ」

洋と著我がジャンプしたことにより相手に隙が出来、俺は足払いをして相手がこけた瞬間に踵落としをして男を床に叩きつけた。

「俺は誰にも負けるわけにはいかねエんだ。あのを倒すまでは

俺はそう言って、洋と著我に合流した。

「弁当確保したか」

「この通りだ」

「なら、俺は帰るよ

「はあ！ なんで！」

「それがな明日の朝からバイトの面接なんだよ
その言葉で一人はこけた。

「また、バイトするのかよ」

「ああ、この夏にしたい事もあるし生徒会の仕事もあるから
それは仕方ないけど。弁当は食べて行けよ」

「それは嬉しいけど。迎えが来てるみたいだから行くよ

スーパーの玄関には黒い服を着た男たちが居た。

「あれつてもしかして」

「そう、あの時の連中だ」

「何でいるんだ」

「俺は迎えに来てくれって連絡したら来ててくれたんだよ
「いつの間にそこまで親睦を深めたんだよ」

「いや、O・H A・N A・S H I したらさ仲良くなつたんだ」

あの時は楽しかつたな、怪我が治つて二つ名が広まつたとにばつ
たりと一人と出会いつてそこからプチプチと一人づつ潰していくん
だよな。

「（争奪戦以外でも戦ってるんだ）」「

「それじゃ、先輩によろしく言つとけ」

俺は男たちと合流して、バイクの後ろに乗りかえることにした。

「（あの人所に行くか。いたら良いんだけどよ）」

俺は祭りの光が消えていく街を見ながら思った。

里帰り（前書き）

テストが終わったよ！　まさか、テストの為に知恵熱が出るなんて最悪でした。

里帰り

寮に戻った時には、日が昇り始めていた。

「さて、こんなもんでもいいだろ？」

俺は部屋を整理して寮を出た、向かったところは小さな靈園だ。

「来るのが遅くなつたよ」

墓には緋音の文字が刻まれていた。

ここは、両親が眠つている所だ。

「最後に来たのは入学式前だつたな」

墓を雑巾で拭きながら呟いた。

あの時の俺は世界から外れているような感覚が襲つたんだよな。
「綺麗になつて良かつたよ」

墓は来た時は少し汚れていたが綺麗に拭き終り、お線香をあげよう

と容器を取り出すと大量のお線香あげて無かつたのに何でカスがあるんだ。ここに来る親族だつていらないんだぜ

「おいおい、この前来た時はお線香あげて無かつたのに何でカスがあるんだ。ここに来る親族だつていらないんだぜ」「俺は頭を搔きながら考えてみたが思いつかない。

「あの、叔父夫婦が来るわけもないからな」

俺が一瞬思つたのは父の弟の叔父夫婦だが、アイツらが来るわけもない！ 俺と結月を「ミミ」の様に見捨てたあの夫婦が来るわけもない。

「い。

「考え過ぎだよな。帰りにファミレスに寄ろうかな」

そもそも、ここは靈園は俺しか知らないはずだ。

俺はバス停に向かうべく歩いていると見たことがある車が止まつた。

「つ！」

俺の顔は一瞬で青くなつた。だって、この車に乗つているのは……

「やあ、久しぶりだね」

車から出てきたのは俺が最も嫌う叔父夫婦なのだから。

「ひ、久しぶりですね。慎一さん。なんでここのを知ってるんですか」「やっぱり、誰にも教えて無かつたんだね」

叔父さんは微笑みながら言つてゐるが氣味が悪い。

「あなたには関係がない事だ」

「関係はあるよ。そこに俺の兄さんが眠つてゐるんだから」

「それでも、その子供を見捨てたあんたに教えるなんて反吐が出る

よ

その瞬間、俺は腹を蹴られた。

「調子に乗るなよオ！ こっちイガヘラヘラしてたらアよオ。俺からしたら自分さえ上手くいってたらアそれでいいんだよオ」「

俺は今までの戦いから受けた攻撃など今より痛いがその場に倒れてしまった。

「お前さえいなければなア、俺はこんなとこまで来なくてよかつたんだよオ」

その間も俺は蹴られている。

「それによオ、お前の妹も死ねばよかつたんだよオ！」

その言葉に俺はキレた。

「なにも知らないくせに、ゴチャゴチャ言つてんじやねニよオ！」

俺は叔父の足を掘み立ち上がり顔をぶん殴つた。

「お前が来るといじらないんだよオ！ わざわざお家に帰りやがれエ！」

もう一度、顔面を殴り寮に帰宅した。

これは酷い

寮に着き、鏡を見てみると酷い有様になっていた。

「これは、少し治療に専念しようか」

その顔はボロボロになつており、デコからは血が出ていた。

「あーこれは面倒だな、もう少し殴つてたらよかつたか」

頭を搔きながら考えたが面を思い出すだけで吐き気がする。

「それにしても、顔は似ないでよかつた。似てたら自殺もんだ」

似てるのは喋り方で他は似てない、良かつた良かつた。

「えつと、明日からは生徒会の仕事があるんだよな」

なにしたらいんだけ、思い出してもおかないと身の危険がする
のは俺だけだろうか。

「コンコン」とドアがノックされた。

「誰だ？」

俺は疑問を抱きながらドアを開けたらそこに居たのは内本だった。

「何の用だ？」

俺は持つているＤＶＤを見ないように聞いた。

「コレを貸そうと思つて」

絵柄は男が鞭で叩かれている絵だった。

「悪いが俺の部屋にはプレイヤーが無いから見れないからいい」

あるのはあるのだが今はそん物を見ている暇がないので断つてお

「う。」

「これはあげるものだから受け取つてくれ」

「俺は見たくないから佐藤の部屋にでも入れておけよ。それか本人
にあげる」

俺は本当にそつちの趣味は無いんだ。ただ、争奪戦せいで殴られる蹴られるが普通になつてただけなんだよ。

「わかった。君は三次元ではなく一次元が好みなんだね」

「そつちも、興味ないから！」

即答だつた。実際、俺はテレビは一コースしか見てないんだよ。

「俺は忙しいから、声かけるなよ」

扉を力強く閉め、ベットの腰かけた。

「はあー本でも読んで気分を変えるか」

俺は最近、アニメ化になつた電文庫のホラゾンを読むことにした。

「正純、可愛いいいなあ」

一巻の下を読み終えて作業に取り掛かった。

夏の終わり

書類やバイトのシフトで夏休みは争奪に行つていかない俺です。

「そろそろ、バイトの時間だな。仕事を打ち切つて行くか」

「バイトはコンビニでレジ打だ。

「今日は争奪戦に参加できるんじやないか」

「今日のシフトは最悪の事態がなければ参加が出来る。

「久しぶりに暴れるとしようかな」

そう言つて寮から出ようとしたら、携帯に一通のメールが来た。

「沢桔姉からだ、久々だな」

メールの内容を確認した。

『今日は参加するんですか?』

『今日の参加のメールだった。』

『バイトが終わり次第に参加しようと思つ』

『送り返したらすぐに帰つてきた。』

「早いなあ……」

そう言いながら内容を見た。

『なら、今回はラルフストアに来てください』

久しぶりに行くところはマツちゃんのところか。

『さつさとバイトに行くか』

俺は楽しみを覚えながらバイトに行つた。

夕方

バイトは時間通りに終わり、今日は久しぶりの争奪戦に参加が出来る。

「久しぶりの弁当だなあ……最近はコンビニの売れ残りをもらつてるからな」

それがコンビニバイトの深夜シフトの特権だ。

「さて、今回の弁当は四つか」

お弁当を確認したところで俺はお菓子「コーナーに向かつた。

「久しぶりだな」

「久しぶりだな」

「どうしたんだ、ここ最近来てないそつじゃないか」

一階堂の視線はお菓子に向いたままだ。

「バイトのシフトの関係で来れなかつたんだ」

「また、始めたのか」

「忙しい方が俺の好きな事だからな」

「あら、久ぶりですね」

「久しぶりですね」

姉妹がこちらにやつて來た。

「久ぶりだな、そろそろ開始するから終わつてから話そつか」

そう言つていると、マツちゃんが半額シールを張り終えて戻つて

行つた。

「そうですね、まるで……」

「まるでの使い方が分からぬなら止めた方がいいぞ」

「そうですね」

妹が俺の意見に同感した。

「えつー！ 鏡は私の見方じゃないの！」

「それよりも、始まつたぞ」

俺は声をかけてから走りだし、一階堂も一緒に駆け出した。

「はああ！」

俺は目の前に現れた男を殴り今回の獲物のジュー・シイー鳥弁当だ。

「今日の俺は今までのブランクを取り戻してやるよ」

ブランクのせいでどれだけ力で殴つていたか忘れていた。

「そこお

男を殴り飛ばし、違う男を殴り飛ばした相手を走つて助走をつけ蹴り飛ばした。

「まだまだ！」

いつもの俺より何だか違う感じがした。

「これは貰つた」

俺は棚に駆け、弁当を探りレジに向かつた。

「今日の獲物は取れたし最高だな」

会計を済まして待つことにした。

「どうだつたんだ二階堂」

会計を済ませた二階堂は弁当を手に入れていた。

「今回はかぶらなかつたからな」

その二階堂の視線は姉妹の方だつた。

「三人とも手に入れたんだな」

「それより話がある」

二階堂のその目は真剣だつた。

「どうしたんだ？」

「お前の戦い方が変わつていたがどうしたんだ？　いや、少し違和感があつたからな」

「いや、最近は忙しかつたからか

「いや、俺の目から見たら戦うことが楽しいと感じてるだろ」

「戦うのは楽しいだろ」

「俺が言いたいのは、相手を殴る、蹴るの行為が楽しいと感じてると言いたいんだ」

「お前なあ、俺はそこまでしなつた覚えはないぞ」

「戦つているときのお前は笑つていたぞ」

俺は驚いた、いつの間にかそんな表情になつっていた自分に驚いた。

「そうだつたのか、覚えておくよ」

「憶えていた方が良いぞ。お前がアイツの様になるのは嫌だからなアイツとは帝王の事だろう。

「あいつは勝ちにこだわつた結果だからな」

「そうだな」

「それじゃ、俺は帰るよ」

「一緒に食わないのか」

一階堂は驚いた顔で聞いてきた。

「学校の書類が溜まってるからな」

俺はそのまま寮に戻り一人で弁当を吃了。

心（前書き）

少しオリジナルに入ります

「」の頃の俺は可笑しくなつてきている争奪戦が終わると顔見知りにどうしたんだと声をかけられる。俺はいつも通りのはずだ。

「はあ、どうしたんだろな」

俺は教室に来てため息をついた。

「どうしたんだ櫂莉？」

洋が近くに来て聞いてきた。

「何だか最近おかしいって言われるんだよ」

「僕から見ても最近おかしいと思うよ」

「どこがおかしいんだ？」

「普段の態度が少し変わったと思ひ」

「俺にはさっぱりだよ」

俺にはどうなつてゐるのかさっぱりなんだ。

「どうなつてるんだ」

その時、放送が鳴つた。

『一年の緋音櫂莉君。緋音櫂莉君。至急校長室まで来てください』

呼び出しだと?

「行つてくるよ」

俺は身に覚えのない事で呼び出されてゐるのかと思いながら校長室に向かつた。

「失礼します。」

俺はノックをして中に入つて行つた。

「やあ、櫂莉」

そこに居たのは叔父だった。

「校長先生、呼び出しの理由とはなんですか?」

俺は視線を叔父に合わせないように校長に視線を向けた。

「実は君が彼を殴つた言われてね」

「」

そうだと思った。

「校長は彼の話を本気で聞いてるんですか」

俺は少し苛立ちながら言った。

「いえ、私は生徒の味方ですよ」

「なら、俺が言えるのは痛み分けです。彼は自分を蹴りました、だから殴りました」

「そうですか。それなら一週間の謹慎処分で良いですか?」

叔父はその言葉を聞きのがさなかつた。

「それは可笑しいんじゃありませんか」

「おかしい、それは違います。彼は自分の罪を認めているんですよ。それにはあなたは自分の罪を隠してここに来ていふことが分かつたので結構です」

その言葉を聞いて俺は教室に戻り帰宅した。

あの、男にはまだまだ後悔してもらうよ。

道（前書き）

ヤバい、オリジナルのストーリを考えたら戦いが無かつた！

謹慎が解けて学校に来たのは良いが、俺を見た生徒は小さく囁く。

「あの、大人しい副会長が暴力振つたらしいよ」
「どこかの不良を纏めてるらしいよ」「みよ」
「あんな顔してやつてる事は黒いらしい」
いろいろ言われる。別にこれぐらいの事を言われるのはなれてい
る。

「ふうーこうなつてると素で過(オ)」した方がいいな
それにしても周りの田は俺を拒絶している。

「洋、お前は離れないのか」「

俺は横で歩いている洋に話しかけた。

「僕は櫂莉の友達だからね」

「その台詞いつか後悔するぞ。それに後悔してからじや意味はない
からな」

「気分転換に今日、一緒に行かないか」「

「ああ、別にいいけど」「

はあ、どうなつてるんだろうな。これから的生活はいろいろ大変
になるだろうな。

「どこに行くんだ」

「ジジ様のどこはどうだ」「

「分かった。生徒会の仕事が終わつたら行くよ」
俺は洋と別れて生徒会室に向かつた。

「今日は仕事は有りませんよ」

えつ！ 俺は耳を疑つた。仕事が無いだと。

「それつて、俺のせいか」「

「いえ、今日は私一人ができる範囲ですので休んでいいですよ」
「俺つて、氣を使われてるの」

「分かつてゐるのなら帰つて下さー」

「別に気を遣わなくてもいい」

「体調がすぐれないようなので帰宅した方が良いですよ」

「残念ながら今日は体調がとってもいいからけだるいのはない」

「いえ、今日は帰つていいですよ」

「だから、俺は」

その瞬間、頬を叩かれた。

「頬が腫れているのでかえってください」

俺はその怖い優しさを受け取りかえることにした。だけど、帰るのは寮ではなくでかける場所がある。

「時間帯もいいか」

俺はジジ様の所に来た。

「今日の弁当は何でもいいや」

今回は弁当の確認を止め、お菓子の袋を見始めた。

「櫂莉、今日は速かつたのか」

洋が後ろから話しかけてきた。

「今日は仕事が無いから帰らされたよ」

「それより、櫂莉は何を探るんだ」

「俺は戦いながら見るからいいよ」

「やつぱり、何かあったのか?」

「何もない、あつてもお前には相談しない」

「僕も櫂莉から相談は受けたことが無いから受けてみたいけど」

「お前に相談すると余計ややこしくなりそうだから遠慮するよ。た

まにはお前と戦いたい」

「それは無理だよ」

そう、俺らの部活では部活仲間との戦いは禁止されている。

「縛られる戦いは好きじゃないんだけどな」

「それより、はじまるな」

洋はお腹がすいてるのか凄いやる気になつていて。俺は何だかやる気が無くなつてきた。

「さつさと終わらせる」

その瞬間、色んなコーナーから人が飛び出した。

「うおおおお！」

洋は叫びながら走つて行つた。

「はあ、狩りの始まりだ」

俺は小さく咳き、背を屈めて走つて行つた。

まずは、フードを被つてゐやつの腹を蹴りそのまま他の奴に当てて二人を潰した。

「そこ」

今度は俺に気づいていない奴の顎をしたから殴つた。いわゆるアッパーをした。

「そのまま、寝てろ」

少し浮いた男に俺は少しジャンプして男の頭を下に蹴りつけまた一人潰した。

「次は、お前だ」

俺は何も考えずにただ、獲物を狩る狼の如く敵を潰していく。

「そろそろ、終了だ」

弁当が残り少くなり余裕がなくなつてきた。

「まだ、洋が取れていないのか」

その瞬間、俺はある事を思いついた。

「あはア、いるじやねエかよ。いい、獲物がよオ」

弁当が残り一つになれば洋と戦えるんじゃないのか、そうだよなこれは採れるか採れないかの世界だよなア。

「おらア」

弁当が残り一つになり洋が残つてゐることを確認して俺は後ろから頭を蹴つた。

「悪く思うなよオ。悪いのはさア、弁当が一つしかない事だア」

床に倒れた俺は洋の意識を刈り取るかのようにもう一度頭を踵で殴つた。

「はア、楽しい時間はまだまだ続くぜエ」

俺は残つてゐる奴を見ながら告げた。俺が弁当を探つた時には全

員が床で氣絶していた。

「俺のこの乾ききった鬪志は收まらねHよ

狂い（前書き）

お気に入り件数が減ろうとも私はこの小説をぶち壊す！

狂い

俺は部活で一番やつてはいけない事をした、それは部活内同士での戦い。それは乾ききった俺の闘志は潤は無かつた。

「これじゃダメだ。こいつじゃダメだったんだ。次は誰にしようかな」

俺は夜の街をうろついた。寮に戻るのは面倒くさい。このまま、朝になるまでうろつくか。

「そこへ止まれよ」

俺は後ろを向いたらモヒカンの男が立っていた。

「何だ？」

俺は睨みながら言った。

「お前、誰の影踏んでるんだよ」

俺の足元にはモヒカンの影があった。

「それが？」

俺は興味が無いみたいに言った。

「お前が踏んでるのは夜の王の影だぞ」

「じゃ、お前は強いのか？」

俺は一コ二コしながら言った。

「お前、殺すぞ」

男は懐からナイフを取り出した。最近のおっさんほりキレやすくてウザイ。

「怖いな、からかっただけで殺されるんですか？　なら、やつてみろよ。そん代わりお前が死んでも俺は責任はありません。なぜなら、過剰防衛だからです。」

「ふざけんなよおおおおおお」

男は走って俺の腹を刺そうとしたが、俺はナイフを持つてる腕を折った。

「ぐつああああああ！　う、腕がああああ！」

「どうだよ、見えなかつただろ。自分が何されたか分からなかつただろ。」

「ば、化物だ」

「サヨウナラ、一般人」
殺しはしなかつた。只、トラウマが残るぐらいの恐怖を味わつてもらつただけだ。

「飽きてきたな、学校辞めようかな」

それが良いのかもしない、あそこに居ても楽しくない。それにアイツに俺の居場所が知られているのがイラつく。

「学校を辞める前にアイツらに戦争でも挑もうか。火種は十分だ」

俺は氷結の魔女と戦いたいが為に色々なヤツを潰してきた。

「そうだよ。俺は元から一人だったんだ。それが、また一人に戻るだけじやないか」

今日は遅いから戻るか、そして明日からは他の連中を潰すために人でも集めるか。

「アハツアアアアア！ 最高だよ！ 本当に世界は何でこいつ都合的に動いてくれるんだよ」

まず最初は山原先輩でも話をするか。

裏路地を歩いていた少年は悪魔のような笑みを浮かべると寮の方に歩いて行つた。

翌日

俺は剣道場を朝早くから訪れたそれは話をするために。

「お邪魔しますよオ」

俺が剣道場に入った瞬間にほとんどの奴は俺を見た。

「部長さんは居ますかア？」

その言葉と共に山原先輩がこちらに来た。

「何の様だ、生徒会副会長

「いやア、俺はさアあんたらが動くつて聞いて話をしに来たんだよオ」

「お前はHP同好会じゃないのか

山原は睨みながら言った。

「おいおい、睨むなよオ。俺さつ、あいつらを潰そつと考えてるんだよねH」

その言葉で山原は驚いた。

「だから、手伝ってくれませんかア？ せ・ん・ぱ・い」

「いいだろ、その代り俺のやり方で行かせてもらうぞ」

「別にいですよオ。俺は人数確保に来ただけですから」

「一つ聞いていいか？」

「今は気分が良いですから何でも答えますよ

「何で、仲間を裏切る」

「……ツハハハハハ！ 仲間、最高な言葉ですけど、俺にとつては仲間は潰すために居るんですよ。だから、潰す」

「それによオ、仲間」ことか俺には無縁ですから。考えただけでも吐き気が来ましたア」

俺はケラケラ笑いながら言った。

「佐藤は俺の獲物だ」

山原は睨みながら言った。

「大丈夫ですよ。俺の獲物は氷結の魔女、だけですから

「お前は勝てるのか

「俺はさア、今まで本氣でやつた時つて怪我とかで力で無くてさア。」

「それに、俺がやりたいのは戦争だから。あの部活を潰すため、入った事を後悔するようなことをしたいんだよ！」

山原は自分の目的と俺の目的が一致したのか「けりに手を伸ばしてきて言った。

「……」

「

「協力する」

唯一言だった。

「俺をがっかりさせるなよ。 猶大

そう言って手をとつた。

「

狂い（後書き）

獵犬群だと協力をした。
てか、最終回フラグだ。

戦い

俺は今、とあるスーパーに来ている。いや、ある奴に会いに来ている。

「やつと来たか、氷結の魔女」

俺の目的の人物が来た。

「お前は自分がやつたことを分かつてゐんだろうな」

魔女はそれだけを言った。

「ワザと決まってるだろ、お前との戦いのための火種だよ」

「友達ではなかつたのか」

「俺には弱い友なんかいらないんだよ。俺はお前と戦いだけだ」

「落ちたな」

ここから、俺がどうなろうと知らない。だが、俺は魔女と戦いたい。

「俺の何も知らないくせにな」

「私に知つた事かお前は部活の禁止事項を破つた、覚悟はいいか」「睨みをきかしてきた。

「その為に俺はあいつを潰したんだぜ」

「ヤリと笑い挑発した。

「今回の争奪戦でお前を潰す」

「出来るなら、やつてみろよ」

そう言つてゐる間に半額シールが貼り終わり争奪戦が始まつた。

「始まつたか」

魔女は走つて弁当に駆けて行つたが俺はゆっくりと近づいて行った。

「おらあ

後ろから襲つてきた男は半回転して首に蹴りを入れて潰した。

「弱いな」

そう呟いて魔女に近づいて行つた。

「遊ぼうかア！ 魔女！」

俺は一気にティショーンをあげて走り出した。

俺の手には何も握られていなかつたが次の瞬間カートが来た。

「アシスト感謝する」

俺は影に居る獵犬の一人に感謝してタンクを武器にした。

「はあ！」

カートのグリップ部分を片手で持ちカゴを載せる部分を振り落した。

「大振りだぞ」

魔女はそれを簡単に避け、蹴つてきたが俺はそれをカートを床に打ち付けその勢いで体をあげて避けた。

「そらあ」

逆立ちをしたような恰好からカートを横に振った。

「ぐつ」

カートは避けられそのままカウンターもらいカートを手放した。

「くそつたれ！」

素手になつたがそちらの方が動きやすいが俺は影にいる男にカゴを投げるよう命じた。それに気づいた男はカゴを上に投げた。

「そこ」

上に気づいていない魔女は俺の行動を不思議に思つてゐるだろう。

「残念」

攻撃が来る前にカゴを掴み物を入れる方を向けガードした。

「どこから」

「俺が一人で来るわけがないだろ」

そのまま、魔女を打ち上げカゴをジャンプ台にして跳躍し殴りかかつた。

「そこオ」

俺の拳は鳩尾に入つた。

「よし」

そのまま、もう一つ来たカゴで地面に叩きつけた。

「お前の弱点だ」

俺は今回の為に色々な事を調べて攻撃パターンを調べつづいた。

「データには勝るものはない」

地面に叩きつけられた魔女が立たない事を確かめ弁当を探るついでに後ろから寒気がした。俺は後ろを向いたら魔女が立ち上がるうとしていた。

「立ち上がってんじゃねエんだよオ」

立ち上がる前に走つて近寄り頭を足で床に叩きつけた。

「これで、終わつただろう」

今度こそこれで終わつたんだ。

「はあ、これで終わつた」

今度は氣絶している事を確認して弁当を取り魔女を潰したことを再確認した。

「これが最高の勝利か」

その日の弁当の味は今まで以上だった。

「次の獲物は誰にするか」

次の獲物を決めその準備に取り掛かった。

壊すだけ

「はあ、なんでこいつなるのかな」

次の日、適当にスーパーに行つてみたら他の奴が結束してたよ。

「アイツが魔女を倒した男だ」

「弱くないか」

「見た目だろそれ」

いろいろ、言われているが俺にはお前らみたいな雑魚には興味がない。

「お前らみたいな雑魚が束になつた所で結果は見えている」

俺はわざと集団に近づき言つた。

「それに、お前らを相手にするなんて最悪だ」

「そう言い残し冷凍食品を見に行つた。」

「今日の弁当はたつたの一ヶ、これはすゞく楽しいバトルになるな。でも、今日のメンツでは樂しくはならないか」

俺は狹犬の一人に近づき言つた。

「こここの弁当は少ないから今日は山原先輩の方に周つてくれ」

「そう言い残し俺は半額神が半額シールを張つてているのを見た。」

「そろそろか」

時間が過ぎるのを待とうとしたら一人の男が近づいてきた。

「それがお前の目標なのか」

「一階堂だつた。」

「俺がしたいようにして何が悪いんだ」

「お前まで豚に落ちるとはな」

「はあん、弁当の一つも取れないお前に言われたくないね」

「それを言えるのは今日までだ」

「一階堂は睨みながら言つてきた

「お前が俺を倒すだつて。まあ、頑張つてくれよ」

「そう言つている間に争奪戦が始まつてしまつた。」

「今日の生贊は何人だア！」

俺は走って棚の近くに来て近くの雑魚を蹴散らした。

「邪魔なんだよ」

そう言つて、周りの奴らを潰していった。

「はあ！」

周りの雑魚を蹴散らし終わつた時に一階堂が来た。

「遅かったな、逃げ出したかと思つたぜ」

一階堂の拳を掴み掴んでいない方の拳で殴つた。

「ぐつはー！」

一階堂は後ろに二、三散歩下がつたが俺の攻撃は止まらない。

「休憩はないぜ」

そのまま、足払いをして一階堂を床にひれ伏させた。

「今日は強い奴が居なくて暇なんだ最後まで付き合つてくれよ」

俺は一階堂の背中を何回も何回の踏んだ。

「アツハハハハハ！」

一階堂の意識はないまま俺は何回も踏み続けた。

「飽きたから帰ろう」

俺は適当に弁当を探つて帰つた。

そして、壊れる

数日が過ぎ、山原先輩は佐藤には勝つことは無かった。

「なんだ、役に立たなかつたな」

そう言いながら俺は学校の屋上で過ごしていた。

「メールが来ている誰からだ」

いつの間にか俺の携帯にメールが届いていた。

「沢桔姉からか」

内容は簡単だ『あなたを倒します』かやつてみるよ。

「なら、今日はそつちの戦場に変えようか」

何だか最近は名のある狼としか戦つてゐるよつた気がしてきたよ。

「狼を狩るか、それはそれで楽しいな」

午後の授業を受けるために教室に向かつた。

授業が終わり放課後は生徒会室で時間を潰して目的の場所に向かつた。

「凄いな周りの目が

スーパーに入った瞬間に俺を睨む人間が多い。

「全員潰してあげるよ」

そう言つて適当に時間を潰そつと考えたら今回の獲物がこちらに来た。

「久しぶりですね」

「ああ、そうですね。それで俺に何か用でしょうか？」

今の俺には関係が無い物だ。

「あなたが何でそうなつたかは知りませんが

「私たちがその考えを変えますわ」

「二人が交互に言つたが関係はない。

「勝手にしたら、あんたらに俺は倒せないよ

そう言つて一人の側から離れた。今の俺にはそんな光はいらない
闇しかいらない。

「そうだ、光は闇が消す」

そう言つて時間を過ぎるのを待とうとしたが今日は客が多いようだ。

「湖の麗人、変態、氷結の魔女、オルトロスなんて運が無い日なんだろうな」

俺は今日、消えるかもしない闇の中から。

「それだけは駄目なんだ。俺には時間が無いんだ」

そう、俺には時間が無い。時間が無くなる前に名のある狼を潰さなくていけないんだ。

「時間だな。魔物の最後の戦いをご覧あれ」

そう咳き戦いの舞台に駆けて行き田の前の一人の頭を掴んで床に叩きつけた。

「まず、二人」

最初は誰からくるだ。

「うおおお！」

最初に来たのは変態だった。

「変態からくるのか」

変態の拳を受け止め開いている左手で殴った。

「權利、どうしたんだよ」

「お前には関係は無いから安心して寝ていてくれ」

そのまま、踵落としが決まると思ったが

「邪魔をしないでくれるかい、麗人」

麗人の足によつて止められ着地しよつとしたから拳が来た。

「がはあ」

俺は上に吹つ飛んだ。俺を殴ったのは魔女だった。

「油断したか」

そう思つていたら上から二人が来た。

「来ると思つていたよ。オルトロス」

ガードしたところで床に叩きつけられればそれでダメージが来る。

「その一撃で俺を潰してみる」

その一撃をくらうことを選んだ。一人の拳は俺の腹に当たりそのまま床に直行した。

「それで終わりか」

床で頭をぶつけたが何とか動ける範囲だ。

「来いよ。俺はまだ立てるぜ」

そう言つてゐるが俺の体力はない。

「俺を倒すのは誰だ。変態かそれとも麗人それとも魔女はたまたオルトロス！ 今宵の戦いは魔物の討伐、果たして誰が俺を狩る英雄になるんだ」

そう言い張つたが視界がぶれてきている。脳震盪だ。

「どうした。来ないのかよ。つまんねえよ

そう言つて俺はその場に倒れこんだ。

何でお前らは同情する目で俺を見てるんだよ。

目覚め

「目が覚めるとそこは、病院だった。

「何でここにいるんだ」

確かに、俺はアイツ等に倒されて。その時、病室の扉が開いた。

「目は覚めましたか」

入つて来たのは沢桔姉妹だった。

「覚めたよ」

俺は睨みながら言った。

「軽い脳震盪でしたよ」

「用は済んだなら帰つてくれ」

俺は一人になりたかった。

「「それは無理ですわ（ね）」」

二人が声を揃えて言った。

「それにしても、体が重いんだが」

俺の体は起きているのに体が動かない。

「それは、そうです。あなたはずつと寝ていたんですけどから」

意味がわからんねえよ。

「あの日からあなたは一週間の間寝ていたんですけどから」

「その間、お前達はここに一週間も来ていたのか」

「そうですわ」

姉の方が胸を張りながら言った。

「下らんな。何で一週間もの間ここに来たんだ」

話の流れ的にはここが一番気になるからな。

「あなたは、私達と戦つて楽しいと言つてくれましたわ」

「それがどうしたんだよ」

「それにある人に世話を頼まれるんですの」

「そういうことですから」

「いや、そんなの知らないから」

「これは決定した事ですわ」

「だから何でお前らなんだよ」

その理由が知りたいよ。

「それは言えませんわ／＼／＼

何で赤くなるんだよ意味が分からん。」

「そうです。それは言えません／＼／＼

「てかよ、世話するのは看護婦で良いんじゃないのか」

「それは必要ありませんわ」

「来ませんから」

「どういうこと?」

「それに私たちはあなたを戻しに来ましたの闇から」

「いや、それこそ意味分かんないから」

俺の人生つてどうなってるんだ

意外な展開

「どうも、病院で軽い監禁に遭つた櫂莉です。軽くトラウマになりました。

「それにしても怖かつたよ」

退院が決まつた当日は一人が来る前に手続きを済ませて素早く出たんだが

「待ち伏せされていた」

ただ今、両腕を二人に拘束されている。簡単に言えば腕に抱き着かれている、そのせいで腕に妙な感触が伝わる。

「離してくれないか」

ダメもとでも。

「無理です」「

ですよね

「それじゃ、どこか行きたい」と「ひは無いかな。一応、看病してくれたみたいだからさ」「

そして、俺の財布は空になつた。

「何で、二人はそんなに俺が心配なんだい」「

日が沈みそうな公園で聞いた。

「それは、言いたくありませんわ」

多分、分かるんだよな。

「俺に好意を抱いてくれるのはいいけど。俺はきつこよ」
諦めるか

「それって」

「俺は一人の気持ちに気づいてますよ。すみません」

「その、スマスマセンはどうですか」

「えつーと、気づいてるのに黙つている方?」

「何で疑問形なんですか」

「そんな事より、何で学校に来てるんだい」

いつの間にか部室の前まで連れてこられた。

「では、入つて下さい」

「俺にはここに入る資格はないよ」

「資格ならありますわ」

そう言つて一人は俺の手を一人で握り、ドアノブの上に置かれた。「すつーう。はあー」

俺は深呼吸して、覚悟を決めた。

「おめでとう」

開けた瞬間にいつものメンバーが居た。

「何だこれ」

俺は一人に背を押され中に入った。

「今日は櫂莉の誕生日だろ」

そう言つて洋が近づいてきた。

「えつと、皆ごめん」

俺は全員に謝った。てか、土下座した。

「気にするなよ」

そう言つて洋は俺の肩に手を置いた。

「ありがとう」

俺は泣きながら言つた。

「本当にありがとうございます」

その後、全員に謝った。特に一階堂には酷い事をしたからな。

「そうだ、お前らこれからよろしくな」

そう言つて沢桔姉妹に手を出した。

「これはどういう意味ですか」

「さっぱりわかりませんわ」

「だから、お前らの気持ちを受け取つてやるよ
恥ずかしく目線を逸らした。

「はい」

二人は嬉しそうに手を握つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2295y/>

幼馴染は狼で狂戦士

2011年12月31日21時48分発行